

徳山高専だより

2017年度 No.71



▲デザコン2017 in 清流の国ぎふ

▼高専ロボコン2017



目次

特集1 第14回デザコン2017	1
特集2 第30回高専ロボコン2017	4
Look Back 2017	7
留学生だより	10
図書館だより	12
高城寮より	13
高専祭を終えて	15
就職・進学状況/就職・進学試験体験記	
本科	17
専攻科	23
卒業生だより	26
徳山高専同窓会「高城会」より	29
退職者挨拶	31
注目の徳山高専ニュース	36
編集後記	

デザコン2017 in 清流の国ぎふ 構造デザイン部門 最優秀賞

想いを紡いで希望を繋いだ初優勝

土木建築工学科 准教授

デザイン研究部 顧問

(構造デザイン部門 指導教員) 海田 辰将

平成29年12月2日～3日に岐阜市じゅうろくプラザで開催された「全国高専デザコン2017 in 清流の国ぎふ」の構造デザイン部門において、EC2小山諒子さん、CA4藤永りささん、CA4横屋翔君、CA3中村智哉君、CA3河村篤志君、CA1角井夕莉さんの作品「紡希(つむぎ)」が36高専56作品の中から最優秀賞に輝きました。構造デザイン部門での優勝は本校初の快挙となります。



徳山高専デザコンチーム & OB/OG、全員集合！

構造デザイン部門とは？

「全国高等専門学校デザインコンペティション」(通称：デザコン)は、ロボコン(ロボットコンテスト)、プロコン(プログラミングコンテスト)に続く、第3の競技に位置付けられた高専3大コンペの1つであり、主に建設系学科(土木系・建築系)で学ぶ全国高専の学生たちを対象とした全国大会です。例年、9～10月までに予選が実施され、これを勝ち抜いた各高専の代表チームが、11～12月の本選に臨みます。本選は、主幹校のある県で開催されるため、毎年異なります。2017年度の開催地は岐阜市でした。

構造デザイン部門は2004年度の第1回大会から続いている代表的な部門です。橋梁やタワーなどの骨組構造物の模型を競技規定に則って製作し、本選会場メインステージでの载荷実験と審査員に対するプレゼンを行うことにより、それらの総合得点で順位が決まります。構造デザイン部門では、競技課題としてスパン1m程度の橋梁が取り上げられることが多いことから「高専版ブリッジコンテスト」として

広く認識されています。寸法、荷重の大きさや種類、支え方、使用材料などの競技規定やテーマも毎年変わります。

構造デザイン部門の最大の特徴は、総合得点に占める载荷実験のウェイトが大きく(7～8割)、作品の性能が数字で示される点です。つまり、作品の主な審査ポイントである「強さ」「軽さ」「美しさ」のうち、比強度(=耐荷力/作品重量)を上げることが設計製作上の最重要課題となります。その上で、作品の「美しさ」を追求し、かつデザイン上のコンセプトも明確にしなければなりません。また、構造デザイン部門は、同一高専内で2チームまでの出場権が予め与えられているために、各高専内で3チーム以上が結成されると、校内予選を行って代表2チーム(2作品)を絞り込む必要があります。このことから、本選会場には全国高専から毎年約50～60作品が集まるため、本選での载荷実験はデザコンの中でも最大のイベントになっています。

構造デザイン部門の軌跡

2010 八戸	審査員特別賞	「らち☆すた」
2011 釧路	審査員特別賞	「麒麟」
2014 熊本	優秀賞(第2位)	「百折不塔」
2015 和歌山	優秀賞(第2位)	「織月」
	優秀賞(第3位)	「美環」
2016 高知	優秀賞(第2位)	「結美弦」
	企業特別賞(第4位)	「透ヶ織」
2017 岐阜	最優秀賞(第1位)	「紡希」

私が着任した直後に、田村隆弘先生より「学生と共に優勝を目指し、一緒にバンザイできるようにがんばれ！」との特命を受けて丸8年、ようやくその夢が叶いました。この8年間を振り返ると、指導教員として、学生の作品づくりに対する指導はもちろんですが、それよりも「人づくり」と「環境づくり」の方に尽力してきた感が強い気がします。デザコン活動を通じて、多くの優秀な後輩学生たちに出会い、実に様々な人間模様や感動的なドラマをたくさん経験させて頂きました。心の底から感謝しています。

このような軌跡を経て臨んだ2017年の岐阜大会では「もう優勝以外はいらない！」との旗の下でチーム一丸となり、12/2～3の本選に出陣しました。

デザコン2017 in 清流の国ぎふ

本年度のデザコンメインテーマは、「デザインが天下を制する」であり、各部門で群雄割拠の戦国時代をイメージしたテーマと課題が設定されました。構造デザイン部門のテーマは「そこのけそこのけ、王者が通る」です。支持条件は、100mmの高低差を有するスパン900mmの単純支持ですが、そこに架けるメタルブリッジには、最大52kg（初期荷重7kg + 10kg × 3 + 5kg × 3）の静的荷重を左右非対称に増分载荷し、かつ砲弾に見立てた重さ5kgの砲丸を3回通過させるという、静的荷重と動的荷重、さらに衝撃が作品に作用するという非常に難しい課題でした。

今回の载荷実験は、群雄割拠ステージと天下統一ステージの2つのステージに分かれており、まずは30kgの静的荷重に耐えて群雄割拠ステージをクリアした後、天下統一ステージにて、5kgずつ荷重を増やしては砲丸を通過させることを1セットとし、3セット全てクリアできたら天下人に位置付けられ、競技得点に最高点(70点)が入ります。ただし、1セットごとに進軍or撤退（リタイヤ）の判断が可能になっており、撤退すればそれまでにクリアした得点が獲得できますが、進軍して失敗（作品が崩壊）すれば、大幅に得点が下がるという、戦略性・ゲーム性が高い競技です。しかも、審査員評価点（プレゼン得点）（30点満点）は進軍or撤退の判断をするために、载荷実験の前に各チームに紙面で渡されます。最終的な順位は、競技得点とプレゼン点の合計100点満点で決まりますが、同点の場合には作品重量が軽い方が上位となります。

10月上旬に行った校内予選では、3チームがエントリーし、全く異なる構造形式を有する作品3つによる载荷実験が繰り広げられました。すでにこの時点で3作品とも最後の砲丸流しまで到達できるレベルまで達しており、最後の砲丸流しに成功した2作品が「双兜（そうとう）」と「紡希（つむぎ）」です。



双兜 (2017)

紡希 (2017: 最優秀賞)

本選は2日間にわたって行われ、初日は作品の仕様確認（寸法検査、重量測定など）とプレゼン審査でした。仕様確認は2作品とも特に問題なくパスし、プレゼン審査に移ります。プレゼン審査はステージ上で審査員3名と各チームの代表学生1名で行われ、それ以外のメンバーは立ち入ることができません。紡希のプレゼンターはCA4藤永さん、双兜のプレ

ゼンターはCA1加納さんでした。作品の前でのわずか1分間のプレゼンといくつかの質疑応答がありましたが、遠望から様子を伺うに、終始笑顔で対応していた2人の度胸と愛嬌は抜群だったように思います。

その後、翌日の载荷実験の説明と見本模型によるデモンストレーションが行われましたが、ここで予想外なことがありました。実際の载荷台から錘受けに砲丸が落下する際の衝撃が予想以上に大きく、砲丸が落下した瞬間、载荷台が浮き上がるほどでした。もちろん、設計には要求荷重に対する若干の安全率を見込んでいますが、果たしてこの想定以上の衝撃を吸収できるかどうかは、完全に分からなくなりました。もしかしたら、载荷実験で撤退を選択することで、何らかの賞を獲れるかもしれません。しかし、両チームのリーダーCA4藤永さんとCA4寺西さんは「私たちにとっては、撤退しての優勝は優勝ではありません」ときっぱり。

そして迎えた決選の日。载荷実験は作品重量の重たい順に4高専同時に行われるため、全56作品の中でも軽量である双兜（640g）は最後から2組目、紡希（526g）は最後の組として载荷実験を行いました。ちなみに、プレゼン審査の得点は進軍or撤退の判断材料として、载荷実験前に各チームに紙面で渡されていましたが、本校のチームは閉会式まで誰ひとり見ていません。余計な動揺や邪念を断ち切って载荷実験に臨むためです。

载荷実験を全部クリアし天下人になる作品は、やはりそれなりの重量を持った作品が多かったように思います。作品重量が1,000gを切ったあたりから、進軍にともなう作品の崩壊が目立ち始めます。



载荷実験（双兜）

载荷実験（紡希）

本校として最初に出陣したのは双兜でした。練習通りに迅速かつ安定感抜群の架設を見せ、架設時間による減点もありませんでした。まず、群雄割拠ステージにて30kgまで一気に錘を载荷しますが、難なくクリア。作品重量は640gと軽量なのですが構造全体の安定性も抜群です。ここから砲丸を流すたびに5kgずつ錘が追加され、最大3回の大きな衝撃に耐えなければなりません。1回目・・・クリア、2回目・・・クリア、3回目の砲丸が通過すれば最高得点です。45kgの荷重に耐えながら迎えた3回目の砲丸が通過し、錘受けに落下した瞬間・・・！なんとアーチリブが衝撃に耐え切れずに座屈してしま

い、惜しくもクリアとはなりませんでした。載荷実験後にリーダーの寺西さんが「私たちの橋は壊れてしまったけど、徳山高専のもう1つのチームに託します・・・！」と涙ながらに声を絞り出しました。なお、双兜と同時に載荷実験を行った他の3高専も全て崩壊しました。今回の競技における軽量化の厳しさが伺えます。

一方、紡希チームは溢れそうになる涙を必死で堪えながら、じっと出陣の時を待ちます。双兜よりも100g以上軽く、しかも砲丸落下の落差がより大きい上路形式であり、美しいけれども細く華奢な印象が強い作品・・・です。今大会で上路形式を選択した作品はたった2作品でした。

いよいよ、その時がきました。紡希の架設は、双兜よりも若干時間がかかりますが、練習通りに落ち着いて制限時間内に無事完了。そして最初の30kgも難なくクリアします。問題はここからでした。紡希は役割ごとに分けられた3つのパーツを組み合わせてできています。学内での載荷実験では、各パーツの役割ごとに考えられたオリジナルの実験を繰り返してきました。これら3つのパーツを組み合わせた状態では、1回しか最後までクリアできていません。しかも本番では想像を超える砲丸の衝撃が紡希を襲います。1回目の砲丸・・・クリア。2回目の砲丸・・・クリア。これまでに、双兜をはじめ、紡希よりも頑丈そうな作品が壊れていく様をいくつも見てきました。そして迎える最後の砲丸流し・・・。ゆっくりと砲丸が動き出し、アーチ頂上から急加速します。大きな音を立てて砲丸受けに着弾したその瞬間・・・紡希はいつも通り、そこに建っていました。会場のどよめきと歓声が上がります。メンバー一同、今度は嬉し涙です。チームリーダーの藤永さんが実験後のインタビューで絞り出した一言。「紡希メンバーだけでなく、チーム徳山高専としてがんばった、みんなのおかげです。」なお、載荷実験最後の組で、天下人になったのは、紡希だけでした。



紡希メンバー

その後の結果発表にて、待ちに待った瞬間が訪れます。“優勝は、徳山高専「紡希」”。再び感涙です。なお、紡希は審査員評価点（プレゼン）も30点満点中29点を獲得しており、第1位でした。過去3大会連続で準優勝だった本校デザコンチームにとって、まさに悲願の初優勝を果たすことができました。

ところで、なぜ紡希は予想以上の砲丸の衝撃に耐えることができたのか？その答えの1つはアーチ先端の小さな滑り台のようなパーツにあります。この滑り台によって砲丸の向きを変えて飛ばし、載荷台に取り付けられた砲丸受けの底面ではなく、側壁に敢えてブチ当てることで砲丸の勢いを殺しているのです。そのためには、砲丸を早い速度で射出する必要があり、最大落差40cmの上路形式をうまく利用した、というわけです。砲丸をゆっくり転がし、できるだけ静かに落下させることが可能な下路形式が多い中、まさに逆転の発想でした。

最後に、本校のデザコン活動に多大なご協力を頂きました教職員の皆様、遠路はるばる岐阜まで応援に駆け付けてくださった元校長の井上直樹先生、デザコンOB/OGの皆さん、デザコンメンバー&指導教員一同、厚く御礼申し上げます。「ぜひ来年もV2を！」とのご期待の声をたくさん頂いており嬉しい限りなのですが、それはわかりません。なぜなら、「結果は後からついてくる、自分たちが思う“おもしろい作品”を創れ！」が徳山高専デザコン構造チームの誇りであり、本科1年生から専攻科2年生まで、敢えて学年混成のチーム編成としている最大の理由だからです。構造デザイン部門の最大の成果は、実は優勝ではなく、人づくりそのものです。実際にデザコンに参加した学生たちが大会後に製作した土木建築工学科内のニュースレター「C&A」のNo.130号（2016高知大会）と133号（2017岐阜大会）を学科HPで公開しておりますので、本稿と併せてぜひご覧ください。



高専ロボコン2017中国地区大会を終えて

高専ロボコン2017中国地区大会競技委員長
機械電気工学科 教授 西村 太志

平成29年10月15日、キリンビバレッジ周南総合スポーツセンターを会場にして、「アイデア対決全国高等専門学校ロボットコンテスト中国地区大会」を開催しました。今大会は本校がホスト校として8年ぶりに開催する大会であり、教職員・学生が一丸となり準備、本番、片付けまでの大会運営を行いました。

■大会の概要

今年の競技テーマは「大江戸ロボット忍法帳」、2台のロボットが様々なアイデアを駆使して相手の風船を割り合うもので、平成19年、第20回大会「風林火山 ロボット騎馬戦」以来、10年ぶりにロボット同士がぶつかり合うガチンコ対決の競技でした。

競技の内容は2台のロボットに風船が5個ずつ、赤・青チームの本陣にそれぞれ10個ずつ風船が取り付けられており、相手チームの本陣、または相手ロボット2台のすべての風船を割ると勝利となります。人の手が届かないような位置にある風船を割るために各チームが自作する「秘密道具」を設けることで、ロボットの多様性が高まる競技課題となっていました。

大会には中国地区8高専から各校2チームずつ、計16チームが参加して熱戦を繰り広げました。本校からはAチーム「駆廻(ランターン)」、Bチーム「がる男」が参加しました。

また、今年は30回という節目の大会でもあり、地区大会でもプロジェクトで競技の様子を映し出すなど、いろいろな工夫が見られました。



競技風景 (徳山高専Aチーム)

■大会前々日 (会場準備)

総合スポーツセンターを借り切った大会準備は教職員・機械電気工学科5年生総動員で大会前々日(10/13)の午後に行いました。フィールドやセットの組み立ての手伝い、ピットや応援席の設営など全員が臨機応変に自分たちの役割を積極的にこなしていました。



設営の様子

■大会前日

大会前日(10/14)の午前中、今にも雨が降りそうな天気の中、続々とロボットが搬入されました。各チームとも早速ロボットの調整に入り、午後のテストランの準備をしていました。



受付及びピットの様子



テストランでロボットの機能確認

■大会当日

大会本番

大会当日（10/15）、あいにくの雨の中、大会本番が始まりました。今年はロボットが全く動かないチームは1チームもなく、いずれの試合も熱い戦いが繰り広げられました。

ロボットも勝負にこだわったロボット、美しさにこだわったロボットなどそれぞれ特徴のあるロボットを作っていました。また、秘密道具も吹き矢を模した飛び道具、ムチのようにしなやかにしなる腕、布ヤサリの代わりにフグの皮を使うなど多種多様でした。本陣の風船を狙うチーム、相手ロボットの風船を狙うチーム、作戦も様々でした。



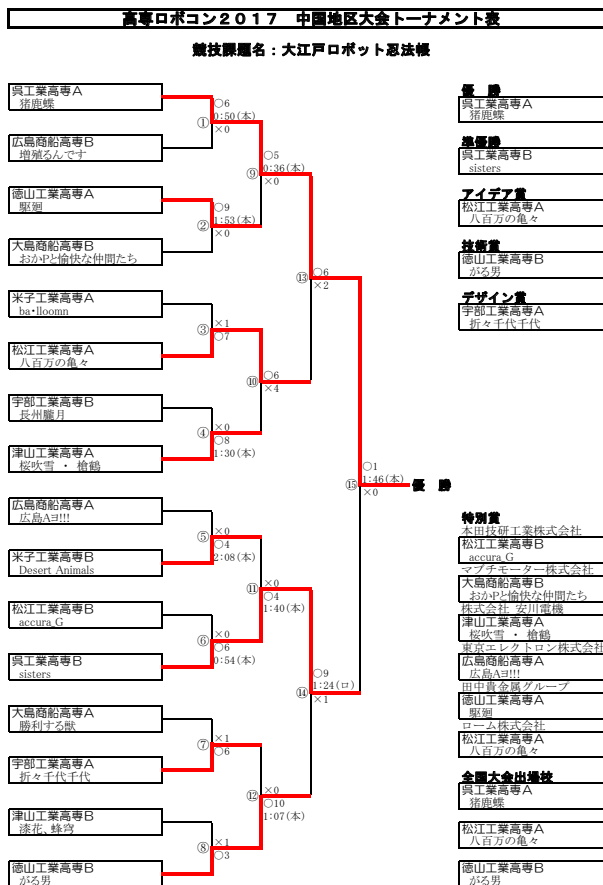
美しさにこだわったロボット

決勝戦は10年ぶりの同校対決、呉高専Aチーム「猪鹿蝶」とBチーム「Sisters」の戦いでした。学内での練習ではいつもAチームが勝っており、Bチームは本番での初勝利を目指しましたが、壁は厚かったようで、Aチーム「猪鹿蝶」の優勝となりました。本校Aチーム「駆廻（ランタン）」は2回戦、Bチーム「がる男」は準決勝まで駒を進め、「駆廻」が特別賞を、「がる男」が技術賞を受賞しました。

全国大会には優勝した呉高専Aチーム「猪鹿蝶」に加え、審査員推薦として松江高専Aチーム「八百万の亀々」、徳山高専Bチーム「がる男」が選ばれ、12月3日に行われた全国大会に出場しました。



全国大会出場決定



中国地区大会トーナメント表（競技結果）

撤収作業

全国大会出場チームも決まり興奮冷めやまぬ中、撤収作業を行いました。撤収作業には1年生全員が加わりました。



撤収作業

■おわりに

8年に一度回ってくるロボットコンテスト中国地区大会の運営ですが、学生・教職員が一丸となって会場設営、運営を行い、滞りなく大会を終えることができました。本大会に参加した他の高専の方々からも多くの賛辞が寄せられました。改めてこの場を借りて、大会に関わった全ての皆さんにお礼を申し上げます。

「がる男」チームと「駆廻」（ランターン）チーム

機械電気工学科
助教 池田 将晃
准教授 藤本 浩

高専ロボコン30回大会の節目を迎えた今年のテーマ「大江戸ロボット忍法帳」は相手の風船を時間内にできるだけ多く割り合うという対戦型の競技でした。競技にはメカトロシステム部で編成した「がる男」と「駆廻」という2つのチームがそれぞれ2台のロボットを製作して臨みました。特に今回は全国大会が一部生放送（NHK）ということもあり、番組を盛り上げるために各チーム同士が激しく接触することを避けられないルール設定となっている上に、風船を割る道具（秘密道具）として硬質プラスチックや木材、金属類などの使用も禁止されていました。どのような材料で道具を作れば良いのか？ロボットの強度はどれほど必要なのか？などアイデア出しは例年以上に難航しました。このため、チームメンバーの志気を維持し、相互のコミュニケーションと連帯感の更なる醸成を目指して、創部以来初めてとなる一泊二日の合宿を慣行しました。その甲斐もあって、設計を済ませたロボット作りは9月に入っ

ていよいよ製作に動き出しました。課題に対して、カンガルーをモチーフにして勝利のために追い求めた池田教員が率いる「がる男」チームのロボットは、相手チームのどんな作戦にも臨機応変に対応できる「機敏さ」と、状況に応じて的確に目の前の風船を割ることのできる「鋭さ」でした。

「機敏さ」を実現するために移動用の駆動系を工夫してロボットが素早く移動できるような設計がなされ、「鋭さ」に磨きをかけるためにエアシリングを使った素早いパンチで風船を割れるような工夫がなされました。そのパンチはカンガルーパンチなどと呼ばれ、パンチの先には風船を割るためのフグの皮が取り付けられました。フグ皮を意外に思われるかもしれませんが、徳山はフグのはえ縄漁発祥の地とされています。地元のお店から提供して頂いた皮を乾燥させると、鋭利な針の鱗が隆起するのでこれを上手く利用しました。

中国地区大会では準決勝まで勝ち上がり、「技術賞」を受賞しました。さらに推薦チームとして全国大会へ進出することができました。例年であれば全国大会は両国国技館でしたが、今回は国技館が耐震改修のため、有明スタジアムを会場としての全国大会でした。試合は辛くも2回戦敗退となりましたが、優勝候補の一角であった1回戦の相手に勝利するこ

とができ会場にいた関係者を驚かせました。このことは参加メンバーの今後の自信になったはずです。

他方、藤本教員が率いる「駆廻」チームのロボットはモチーフが中々決まりませんでした。最終的に“周ニャン（周南）市”に敬意を表して「猫」に落ち着きました。戦略的にロボットはX形状をした本陣の下をくぐるように小型化されました。接触による肉弾戦には不利ですが、本陣の裏側から表側に最短距離で移動できるメリットが優先されました。また風船を割る道具としてはフグ皮の他に松葉や柘の葉など植物由来のものも候補として考えられましたが、最終的に高速に出し入れするコンベックス（巻き取りメジャー）の先にフグ皮を取り付けたものが秘密道具となりました。

中国地区大会では緊張のためか、本陣の下をくぐるパフォーマンスを披露することができませんでした。二回戦まで勝ち進み、「審査員特別賞」を受賞しました。全国への出場は叶いませんでしたが、緊張の中で精一杯の戦いできたこと、全国での戦いは「がる男」チームに任せることとなりました。



中国地区大会後の集合写真
(中央のロボットは「がる男」チーム、両脇のロボットは「駆廻」チーム)

最後に、私事（池田教員）ではありますが、高専生時代に高専ロボコンに参加したことがあります。この当時には叶えることができなかった全国大会出場という舞台を、今回は指導教員という立場で学生と共に初めて経験することになったことは大変感慨深いものでした。私は今年度からの着任でしたが、これから徳山高専チームの活躍を少しでも支え、学生と共に成長していければと思います。

Look Back 2017

機械電気工学科

8月28日～9月1日の5日間、誠和工機株式会社へインターンシップに行きました。企業がどのような仕事をしているのか実際に体験し、社会に出ていくにあたって必要なことを知りたくて参加しました。この会社は設備工事業で、たくさんの種類の仕事があり5日間でそれぞれ違うことを体験しました。特に印象に残ったのは自分でスケッチした配管図をAutoCADと呼ばれるCADを使って図面にしたことです。いつも使っているSolidWorksとの違いがあり、初めは操作に慣れていなくて苦戦しましたが完成したときの達成感が大きく感じられました。最終日には社員の前でインターンシップの感想を発表しました。人の前で発表するのはとても緊張しました。インターンシップを終えて思ったことは、人とのコミュニケーションの能力の大切さです。最初に「挨拶はきちんとしようね」と担当社員が教えてくれました。挨拶はコミュニケーションのはじまりだと思います。これからは、自ら進んでやっていきたいと思っています。

機械電気工学科2年
石田 雅治

「また徳地か…」という予想通りの反応を示していた3年生を引率し、9月21日～22日に国立山口徳地青少年自然の家で1泊2日の合宿研修を行いました。徳地アドベンチャープログラム(TAP)を活動の中心に据え、クラスの一体感と共助精神を涵養すると同時に、写真にあるようなハイエレメントという高所での活動に挑戦して自信と自己肯定感を高めることを目的としました。研修後の学生の感想は、「仲間の存在の心強さを再認識できた」、「行動に移せば何とかなるもんだ」、「人の良いところがたくさん見つかった」など、担任として嬉しい多くの気づきや学びを得てくれたようでした。



機械電気工学科3年担任
張間 貴史

機械電気工学科4年生は9月13日～15日の間、東京へ2泊3日の研修旅行に出かけました。初日はサントリーホールディングス株式会社のビール工場を見学しました。広い工場にも関わらず、少ない人員で作業をしていたことや何メートルもある醸造用の機械を利用した仕込み工程のスケールの大きさに驚きを感じました。二日目の筑波宇宙センターの見学では、人工衛星の監視などを行っている管制室の一部を見学し、日本や世界が行っている宇宙開発の取り組みを知ることができました。三日目は現地解散して友達と東京観光をしました。実際に東京の街へ出てみると、想像した以上に迷うことが多く、現地の人に道を尋ねるなどして観光しました。

この研修旅行では、地元での生活や勉強などではわからない、非常に多くのことを学びました。この体験を活かしてこれからの将来を考えていくとともに、残り少ない高専生活でこのような思い出をしっかりと作っていかうと思います。

機械電気工学科4年
西山 航太

日本工業大学主催の第8回3D-CADプロダクトデザインコンテスト「テーマ部門」に応募し、優秀賞を受賞しました。

今回のテーマは「役に立つメカ」ということで、球状の自動配達ロボット「ころころトン」を設計しました。メカナムホイールを持つ4輪駆動車を球体の中に入れ、その車を制御することで重心をずらし、前後左右に転がっていきます。中に入れるものに衝撃を与えないために膨らませられるゴムを用意したり、ふたや内部の構造を工夫してみたりと、行き当たりばったりの設計でしたが、楽しかったです。



機械電気工学科3年
田中 勇真

Look Back 2017

今年の情報電子工学科

情報処理学会と電子情報通信学会からW受賞

平成28年10月開催の第67回電気・情報関連学会中国支部連合大会において情報電子工学専攻1年生(当時)の村重哲史君が行った研究発表「赤外線画像におけるHOGを用いたリアルタイムハンドジェスチャ認識に関する研究」に対し、情報処理学会中国支部優秀論文発表賞(2017年5月)および電子情報通信学会中国支部連合大会奨励賞(2017年3月)が授与されました。



パソコン甲子園2017で佳作受賞

パソコン甲子園は、高校生と高等専門学校生(3年生まで)がプログラミング能力などを競うICT分野の全国大会です。この大会は3つの開催部門があり、いちまいの絵CG部門(応募作品数313作品)で3年の芳岡優衣さんが佳作を受賞しました。今年のテーマは「友と学ぶ」でした。この作品は、作品名が「共に成長」で、「友達の成長を光る木で表現しました。共に学び成長していく様子を想像できるように回想シーンなどを入れて工夫しました。」との事です。製作日数は12日です。



アプリ甲子園で決勝大会に出場

中学生と高校生のためのスマートフォンアプリ開発コンテストです。一次選考会、二次選考会を経て10月15日にファイナリスト10組が集まり、D2Cホールで「アプリ甲子園2017」決勝大会が開催されました。3年生の関谷恒甫君と1年生の石田薫子さんの組が選ばれました。作品名は「天動説と地動説」で、スマートフォンのジャイロを利用したゲームです。関谷君がプログラムを、石田さんがイラストやBGMを担当しました。



NHK山口放送局「情報維新!やまぐち」に出演

11月30日のNHK山口・情報維新やまぐちにて、情報電子工学科が特集されました。番組内では学生が制作した、人が通るとその動きに合わせてディスプレイ内の葉っぱが舞い上がるメディアアート作品「SOAR」が紹介されました。(制作:専攻科2年村重哲史、専攻科1年片岡駿之介)



Look Back 2017

2017年度の土木建築工学科

土木建築工学科
渡辺 勝利

【1年生】

4月4日の入学式で41名の1年生が入学してきました。入学後、授業や様々な行事を経験し、高専生活にも慣れて、様々なクラブ活動や課外活動においても活躍しています。とくに今年のデザコンでは最優秀賞を受賞しましたが、そのメンバーに1年生の女子学生が含まれていました。来年は、2年生になり先輩となります。さらに頑張って飛躍してほしいものです。

【2年生】

9月21日に現場見学会を実施しました。今年の見学先は、広島市内の新しいタイプの高校の建築現場と岩国市の平瀬ダム工事現場です。高校の建築現場では、実習で習っているレベルを使用した精密な測量が行われており、学生は興味をもって説明を聞いていました。平瀬ダムでは、ダム本体の施工がかなり進んでおり、完成後は見られなくなるダム湖底で記念撮影をしました。建築、土木の現場を見学し、将来を考える有意義な1日となりました。



平瀬ダム建設現場 (2年生)

【3年生】

今年度の集中測量実習では、10月17日～20日まで島根県にある国立三瓶青少年交流の家に宿泊し、施設とその周辺の地図を作成しました。実習では踏査、選点から始められ、途中雨天となり、作業が難航しましたが、高精度の骨組み測量が完成した時は、学生の歓声が上がりました。最後にCADで地図が完成し、3年間の測量の座学、実習の集大成となりました。



国立三瓶青少年交流の家での集合写真 (3年生)



戦艦ミズーリ (真珠湾) にて (4年生)

【4年生】

本年度のCA4研修旅行は9/11(月)～15(金) (3泊5日)の日程でハワイに行ってきました。初日の全体研修では、真珠湾のシアターで戦争の歴史を学び、アリゾナ記念館や戦艦ミズーリを訪れました。また、ハワイ州最高裁判所、イオラニ宮殿などの建築物も多く視察しました。2日目からの自主研修では、学生たちは友人と一緒にB級グルメ、スキューバ、パラセーリング、ショッピング、ダイヤモンドヘッド登山など朝から晩まで得意の(?)英語を駆使してアクティブに活動していました。

【5年生】

10月27日に卒業研究の中間発表が行われました。4月から取り掛かった卒業研究について、就職試験や体育大会に時間を取られながらも、これまで行ってきた内容を発表し、一区切りをつけるための大事なイベントでした。発表に対して多くの意見をいただき、今後の研究方法を改善し、論文に仕上げていきます。本発表は1月25日に本校会議室、26日にメディアホールで行います。立派な論文に仕上がるように期待しています。

留学生だより



徳山高専での貴重な3年間

土木建築工学科

ジュグデルガラフ サロールブヤン

Jugdergarav Saruulbuyan
(モンゴル)



私は高校三年生のときJICAの関係で10日間日本に来る機会がありました。その時日本に来て、どこでも架けている橋、立体化道路、時間に来る電車、新幹線を見て本当に驚きました。そのときから日本に留学し日本の優れている土木技術を学んで帰りたと思いました。最初に日本語学校で一年間日本語の勉強をして徳山高専に入学しました。高専に入って3年間近くなりましたが、振り返ってみると、高専生活でちゃんとした挨拶からはじめ、勉強はもちろん、色々な経験し、同級生たちや先生方、寮生たちと出会い、豊かな環境で過ごした貴重な3年間だと感じています。最初の頃は日本語も不十分で新しい環境で一人になって苦しい時もあったが、皆の温かい気持ちや先生方の優しさで勉強もできるようになって寮生活にも慣れてきました。今考えても、私にとっては徳山高専の皆さんはなによりも優しいという気持ちでいっぱいです。これからも徳山高専の卒業生であることを誇りをもって一生懸命に頑張っていきたいと思っています

高専での生活

土木建築工学科

ヌウオン トラー

NGUON TOLA
(カンボジア)



2014年に来日し、1年間東京日本語学校に通っていました。そして、2015年に徳山高専に来て土木建築工学科で多くの専門科目を勉強し始めました。最初の頃は日本語能力が不足なので、日本人の友達とのコミュニケーションにも授業にも大きな壁がありました。その頃は何回も考え直し、なぜこんな難しい環境に来たのか何回も何回も帰国しようと思ったことがありました。でも、困難に遭ったからこそ自分はそれを乗り越えれば絶対にいいことがあるはずといつもいつも自分を励ました。諦める前に一回ぐらい挑戦してみないと後で後悔があるから、それに対して私はいつか絶対あの壁を越えると自信を持ちました。

それはやっぱりやりがいがあることであり、1年間を経たか経たないかのうちに私は高専での生活を楽しむことができました。高専でこの3年間は専門分野知識を身に付けるだけじゃなく、様々なことを学びました。自分の独立性や困難に乗り越えられる精神力などが高まったり、人間関係もよく分かるようになってきたという貴重な経験が貰えます。私にとってこの3年間で自分の一番成長したことは二つほどあります。一つ目は人間関係です。人はそれぞれの考えを持つことを認め、あまり他人から期待しないことを頭に入れていたらがっかりすることは決してないと思います。二つ目は、問題を解決する能力が高まります。

最後に、私はこれを読んでいる後輩たちに伝えたいことがあります。困難に遭った時は落ち込まずに、絶対乗り越えられる方法があることを頭に入れて毎日頑張ってください。そして、諦めるはあくまでも良い選択ではありません。(Giving up is not a choice.)

Even there are one thousand reasons to give up, please find the one reason for you to go on.

二人ともありがとう！

チューター 土木建築工学科

加納 萌里

留学生の2人と出会ったのは、3年になった時でした。私は、特別英語ができたりする訳ではなかったのですが、チューターを任されたとき不安が大きかったです。でも、留学生の二人と出会って、安心しました。二人とも、私よりも日本語が上手なのではないかと思うくらい沢山話しかけてくれて、とても優しくかったです。

サロールとは、国のお菓子をもらったり、色々なお話をしたり、3年の時に一緒に制服を着たりとたくさん楽しい思い出があります。

トラーには、ひたすらにテスト週間に勉強を教えてもらったり、話し相手をいっぱいしてもらったり迷惑ばかりかけていたかも知れません。

チューターとしての仕事ができただろうかとは不安ですが、私は二人と出会えたことが本当に嬉しいです。夢を持った留学生の二人が傍にいて、私自身も良い影響を受けて、成長することができたと感じています。沢山の感謝の気持ちでいっぱいです。

出会ってからの3年間、文化の違いや、言葉をいろいろ教えてもらうこともできました。そして、様々な国から来ている先輩や、後輩の留学生の皆と仲良くなれたのは、サロールとトラーのおかげだと思います。本当にありがとう。いつか、また集まって土木建築工学科5年生のメンバー皆で食事とか行きたいな。



留学生チューターを経験して

チューター 土木建築工学科

西部 雄介

留学生チューターになったのは、3年生の時に海田先生からのお誘いを受けたことがきっかけです。私は人見知りで、2年生の時も自分のことだけで精一杯だったのに、留学生のお世話なんて本当にできるのかと、不安でいっぱいでした。それでもチューターを引き受けたのは、チューターになれるチャンスは今しかないと思ったからです。留学生の学習面や生活面のサポートと聞くと少し堅いイメージがありま



したが、実際には友達と接する感覚で、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

トラー君のチューターになって、自分にプラスになることばかりでした。レポートの作成やプレゼンテーション、大学の面接練習など、できる限り分かりやすい日本語の表現を彼に教えていく中で自分も、もっと日本語表現を勉強しなくてはならないと思うようになりました。自分が思っている以上に、知らなかった漢字や言葉の意味が見つかり、一つひとつ調べながら彼と共に勉強してきました。彼と一緒に勉強してきた結果、4年、5年と学年が上がるにつれて成績も上がってきて、相手に伝わりやすいプレゼンスキルも身に付けることができました。人のために頑張ることは、自分の成長につながることを実感しました。

また、将来のことについて話したり、共通の趣味であるサッカーの話で盛り上がったりと、楽しい時間を過ごすことができました。日本人とカンボジア人の物事のとらえ方の違いや、ライフスタイル、悩み事など、彼としか話すことのできない貴重な会話もできました。チューターを引き受けて本当に良かったです。

このような経験ができたのも、彼が日本に留学することを決意したことや、海田先生がチューターを勧めてくださったおかげです。彼との出会いと、今の環境に本当に感謝しています。彼とは別々の大学へ進みますが、お互い成長した姿で再開できる日を楽しみにしています。

二度と戻らない青春

土木建築工学科 第24期卒

ヴ レ ビック フーオン

VU LE BICH PHUONG

株式会社 日建設計

エンジニアリング部門 構造設計部



私が徳山高専で勉強したのは2002年から2005年までの3年間でした。卒業後は鹿児島大学に編入し、大学院は東京工業大学で勉強しました。日建設計という建築設計会社に就職し、構造設計の仕事をしています。日本での仕事はもちろん、ベトナムの建物の設計にも携わっています。

徳山高専を卒業してもうすぐ13年、今振り返ってみれば、あの頃の自分は未熟で世間知らずで、日本語がまだ下手で日本の事もよく分かっていなかったのですが、先生方が優しく色々なことを教えてく

れました。大学の先生と違って高専の先生は面倒見が良くて、授業だけではなく生活の面でもサポートしてくれました。クラスメイトとは、年の差もあって最初は馴染めなかったのですが、時間が経つにつれて仲が良くなり友達もたくさんできました。思い出がたくさんできて楽しく過ごした3年間でした。

青春時代は悩みがあるのはよくあることだと思いますし、留学生はそれに加えて慣れない環境で頑張っているの、ストレスを感じたり戸惑ったりすることもあるかもしれません。そんな時は一人で抱え込まないで、周りの人や遠くにいる家族や友達に相談してほしいです。そして高専にいる3年間をぜひ大切にして、勉強だけでなく遊びにもスポーツにも趣味にも出会いにも積極的に取り組んで、毎日を充実してください。後で必ず自分のためになると思います。悩みながら迷いながら、みんな成長していきます。

同じ徳山高専の卒業生として留学生の皆さんにいつか会えると嬉しいです。



平成29年5月13日～14日 留学生研修旅行 in 九州



平成30年1月13日 留学生のつどい

図書館だより

図書館閲覧室の書架が新しくなりました！

昨年度末に図書館閲覧室の書架が数十年ぶりに更新されました。書架の更新に伴い、閲覧室の配置を見直し、車椅子でも利用可能なスペースを確保しました。また、書架自体の耐震性が向上しただけではなく、上段の書棚には耐震マットを設置し、地震発生時の本の落下が軽減されるようになりました。閲覧性と安全性の両方が改善された図書館をぜひご利用ください。



昨年度の図書貸出冊数は、過去10年間で最多となりました。図書館では皆さんにより多くの図書を利用してもらうと考え、昨年度から図書館利用規則を変更しています。学生の図書貸出期間を延長し、貸出冊数も増やしました。学生の皆さんの積極的な利用を期待しています。また、図書館では、特定のテーマの本を紹介するコーナーを定期的に設置しています。本選びの参考にしてみてください。昨年度からは教員推薦図書の購入も再開しました。図書館に入つてすぐ左側に教員推薦図書のコーナーを設置しているので、ぜひご利用ください。

平成29年の図書館アシスタントの紹介



機械電気工学科5年

岡村 侑樹

機械電気工学科5年

村上 蓮太

情報電子工学科5年

藤山 あかり

情報電子工学科5年

前田 珠緒

情報電子工学科5年

原田 慎太郎

情報電子工学科5年

廣澤 勇樹

土木建築工学科5年

五郎丸 直樹

土木建築工学科5年

佐々野 祐太

土木建築工学科5年

西部 雄介

土木建築工学科5年

山根 克稔

高城寮より

「break」

高城寮の一年（平成29年度） を振り返って

寮務主事 橋本堅一

平成26年度4月より寮務主事を担当しております橋本（土木建築工学科）です。高城寮では、現在男子113名、女子21名の総勢134名が寮生活を送っています。（H30.1.15現在）

標題の「break」は今年度の寮生会のテーマ（目標）です。4月4日に行われた寮生会リーダー研修会において、國光寮長により強い希望をもって提案され、決定したテーマです。「break」には多くの意味がありますが、寮生会そのものが活性化してヒットしていく意味と、既存概念を打破して、さらに飛躍した寮生会にする意味を主な目標にして行動に移してきました。このテーマの下、寮生会は今年度1年いろいろな活動、取組みをしてくれました。

12月17日には寮祭が例年のクリスマス会形式を打破して行われましたが、開催に向けて、高城寮の玄関のライトアップが昨年よりまた一層進化しました（写真1）。



写真1 学寮玄関の豪華になったライトアップ

今年度1年も、いろいろな事柄で寮生と関わりましたが、「様々なことによく頑張ってくれている」というのが率直な感想です。もちろん問題は全くないわけではありません。しかし、寮生会を中心に今年度の寮生会のテーマ「break」を念頭に、多く問題を解決し、自分たちの寮を少しでも良くしようとしている姿は誇りにさえ思え、感謝の気持ちを持ちました。以下、寮生会を中心に寮生が取り組んだ今年度の主な行事について記します。

入寮式【平成29年4月4日（火）】

今年度は1年生35名、留学生2名、4年生を1名の計38名の新入寮生を迎えました。保護者、寮務担当教職員、寮生会役員に見守られて、内務部長の太夫本君の進行で入寮式が始まりました。入寮生を代表して船戸満希君が宣誓し、和やか雰囲気での式典が行われました。式典の進行は、楽しく心の余裕もてる今後の寮生活を示唆しているかのように、寮生会役員の巧みな運営でスムーズに行われました。



写真2 平成29年度 新入寮生と寮務教員

新入寮生歓迎マッチ【平成29年4月15日（土）】

今年はサッカー、フリスビードッチそしてしっぽ取りゲームで競いました。体育部長の吉野君の企画の下、寮生が協力して運営を行いました。特にサッカー場全体を用いて、4チームで行われたしっぽ取りゲームは作戦などが多彩で大いに楽しめたようです。競技の後は屋外でバーベキューを楽しみました。今年度は1年生の入寮生が35名と2年連続で突出した人数となり、全体でも136名とここ数年の3割増しの寮生数となったため、例年よりにぎやかに感じました。



写真3 新入寮生歓迎マッチの後のバーベキュー

勉強会（各定期試験前）

指導寮生長の西山君、学生相談員を中心に、各定期試験の3週間前から1週間前にかけて恒例の勉強会を実施しました。寮の食堂で20:00～21:30まで、低学年を中心に多くの寮生が参加し、集中して勉強

を頑張りました。ほとんどの実施日に50人を超える参加者があり、成績も昨年と同様、好成績が維持できています。

寮生マッチ【平成29年6月17日(土)、10月22日(日)】

寮生マッチは、前期はバスケットボールとソフトボールそしてリレー、後期は雨天のためフリスビードッチ、バスケットボールそしてしっぽ取りゲームで行いました。リレーは第一走者の女子寮生からアンカーの5年生まで6人でつなぎましたが最後まで接戦で大いに盛り上がりました。後期の寮生マッチは、計画では11月となっていたのですが、行事や試験を考慮して10月の開催となりました。例年より参加者は少なめでしたが、1年生女子の活躍を頼もしく感じました。



写真4 前期寮生マッチでのリレー

七夕会【平成29年7月13日(木)】

今年度も福永、松岡両企画部長の発案でそうめん流しに代えて、一部「フルーツポンチを楽しもう」と二部「花火大会」が企画されました。1部ではじゃんけん大会やゲームなども行われ、商品も用意されました。



写真5 「フルーツポンチを楽しもう」の一場面

寮祭【平成29年12月16日(土)】

3回行われたクリスマス会形式に代えて、トランプ、花札、ルーレット、丁半が準備され、会場はミニカジノと化しました。豚汁、バケツプリンがふるまわれる中、ステージも準備され、ステージでは「大喜利」等が行われました。



写真6 寮祭でふるまわれた豚汁とバケツプリン



写真7 ルーレットに興じる寮生

予餞会【平成30年1月12日(金)】

間もなく卒業する5年生を送り出すための予餞会が開催されました。今年も準備から企画運営まで、副寮長の三浦君と企画部長の福永君を中心に計画的に、多くの寮生が協力して頑張ってくれました。お笑いライブ、ゲームなど盛りだくさんの内容で、とてもいい雰囲気の中、最高に盛り上がり、感動あり、涙ありの素晴らしい予餞会でした。



写真8 予餞会の女子寮企画を楽しむ5年生



写真9 予餞会のお笑いLiveに興じる5年生

高専祭を終えて

学生会長 豊嶋謙太

今年度も多くの方々の御協力をいただき、無事に高専祭を終えることができました。心より感謝申し上げます。

本校での高専祭も今年で43回目を迎え、私たち学生会役員は「4E」をテーマに様々な企画の立案や計画を行いました。これらは予想以上に難しく、我々学生にとって貴重な経験でした。結果として、多くの方々に御来校いただき、大成功を収めることができました。

来年度は更により良い高専祭となるよう努力していきますので、今後とも徳山高専をよろしくお祈りします。



高専祭実行委員長 西村直輝

今年度の高専祭のテーマは、Eat（食べて）、Enjoy（楽しんで）、Energy（エネルギー溢れる）、Excellent（素晴らしい）高専祭にしようという意味を込めて、「4E」でした。皆さん、楽しんでいただけましたか？70人規模の大きな集団で一人一人が自覚を持ち、一つの大きなものを作り上げたことは私たちにとって大変貴重な経験になりました。新企画やトラブル等で大変だったときに助けてくれたのは、学生会の仲間や教職員の皆さまでした。本当にありがとうございました。

また、地域の方々、スポンサーになってくださった企業の皆様の協力がなければ高専祭を開催することはできなかったと思います。この場をお借りして御礼申し上げます。

今年の反省は山のようにあるのでしっかり後輩に引き継ぎ、より良い高専祭を造ってくれると期待しています。

スポンサー部署長 田村佳愛

スポンサー部署では、高専祭スポンサー活動の運営や、お金の管理をしています。

今年もたくさんの企業の方々にご協力していただいたおかげで、盛大に高専祭を開催することができました。支援していただいた皆様に感謝し、謹んで御礼申し上げます。

メイン部署長 橋本菜帆

今年度のメイン企画「Truck Target～魔法の力で姫を救え～」は高専祭の2日間、たくさんの方に

足を運んでいただき大盛況でした。徳山高専の3学科の技術を合わせ最高の出来になったと思っています。私は2年生の頃からメイン部署に入り何もわからないまま先輩にくっついて作業してきました。でも今回は最高学年になり、さらに部署長という立場になったので、全体をまとめながら自分の学科の作業をしなければならなくて、思っていたよりもはるかに大変でした。しかし、部署員のみんなが支えてくれたり一緒にわいわい作業してくれてとても楽しく活動することが出来ました。メイン部署はほかの部署に比べて人数も多いし、長い期間ずっと一緒に作業するので部署員同士の絆がすごく深まりました。とても充実した高専祭と準備期間でした。3年間メイン企画に携われて幸せな気持ちでいっぱいです。

来年度メイン部署になったみんなにもこの達成感と感動を味わって欲しいです。このような体験が出来ることを貴重な事だと思って様々なことに挑戦しながら、楽しみながらがんばってほしいです！来年度のメイン企画も期待しています！

ステージ部署長 河村至紀

今年のステージ企画はいかがだったでしょうか？ステージ部署の主な仕事は当日のステージ企画の運営、進行です。その他にステージ背景の絵の作成、各企画の準備等があります。今年は段取り八分を大切に、早め早めの準備をしていました。それでも本番当日は予期していないことも起きましたが、部署の皆で協力しあい、乗り切ることができました。ステージ部署全員がそれぞれの良いところを出して、ステージ企画に足を運んでくれた方に笑顔をお届けられたと思います。高専祭が終わると多くの方から面白かったよと言ってくれました。

演出部署長 三原優大

皆さん、LIVE・ファッションショーは楽しんでいただけましたでしょうか？

今年の演出部署は、太鼓やプロジェクション、LightSync（スマホでサイリウム）といった新しい企画に挑戦しました。はじめは周囲から成功させるのは難しいのではとの声もありましたが、部署6人の頑張り、周囲の支えのおかげでやり遂げることができました。本番の会場の盛り上がりや、周囲からの楽しかったとの声が、演出部署としてはこれ以上ないくらいの喜びでした。





広報部署長 能見綾乃

広報部署はパンフレットやポスターなど高専祭に関する広報活動をしました。

今年のパンフレットは食べ物をテーマにデザインを考え、1ページ1ページを楽しんでみていただけるよう工夫をし、部署員の個性が詰まった素敵なパンフレットとなりました。配り始めてから沢山の方にお褒めの言葉をいただくことができとても嬉しかったです。

このパンフレットを無事制作できたのも多くの方々の支え、ご協力のおかげです。

部署長になりたての頃は不安でいっぱいでしたが、部署員みんながずっと支えてくれていたおかげで困難に直面しても大きな問題を起こすことなく乗り越えることができました。来年もみんなで支えあって、個性あふれるパンフレットを作ってください。



会場部署長 福本拓也

会場部署の主な仕事は前日企画の○×ゲームや交通整理です。今年は去年よりも人数が減って、一人当たりの負担が増えてしまっていました。しかし、やる気に満ち溢れてパワフルな部署員たちのおかげで、トラブルなく円滑な交通整理を実現させることができました。交通整理中に目に入ってくる高専祭をまわって帰路に就く人たちの笑顔は、高専祭の成功を十全に物語っていたと思います。

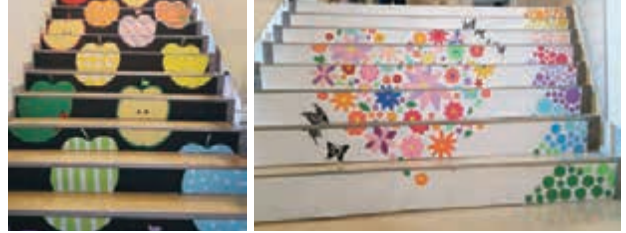
部署長という立場は想像以上に忙しく責任ある立場でしたが、それらが自分を大きく成長させてくれました。

案内部署長 川崎泰奈

今年も階段アートや正門看板など校内の装飾を担当しました、案内部署です。

今年はオール女子メンバーということで、女子らしさを生かした作品をたくさん作ることができ、高専を華やかに装飾することができたと思います。部署長になり、なかなか予定通りに進まず大変なこともありました。新しいことにも挑戦でき私にとってもためになり、また、先輩方のありがたさを改めて感じた一年でした。

来年の案内部署にも乞うご期待を！



物品・バザー部署長 寺西冴映

物品・バザー部署ではおもにバザコンの企画と運営、物品の管理、バザーの管理をしていました。高専祭前から当日にかけて物品の準備を手伝っていた方、書類関係を今年は新しく紙媒体から電子媒体に変更したのにも柔軟に対応していただいた各バザー担当者の方、沢山の協力のおかげでバザーもバザコンも無事終えることができました。

はじめは部署長という立場で不安しかありませんでしたが部署のみんな、学生会メンバー色々な方々に助けられながら最後までやりきることができました。また、今年は特にバザコンの知名度をもっと上げようと部署員全員で案を出し合いながら作業に取り組みました。少しでもバザコンの存在を知っていただけていたら嬉しいです。

この1年間いろんな経験ができてとても楽しかったです。物品・バザー部署で2年間活動できてよかったです。

周南ロボコン部署長 岩本将真

周南ロボコン部署は、高専祭1日目に行われる周南ロボコンの企画、運営など大会に関わることに携わっている部署です。夏には小中学生を対象としたロボットの製作教室を高専や公民館で計6回開催し、180台以上のロボットを作製しました。

今年度は過去に例のない程の大掛かりなフィールドを製作しました。そのため、大会直前までフィールドの調整を行ったりと苦労もありましたが、本番では参加者に楽しんでもらえるものになりました。

部署長という大役は不安もありましたが、優秀な部署員が支えてくれたおかげで素晴らしい大会になりました。

美化部署長 小林知明

わたしたち美化部署は、カウントダウン看板の作成、ごみ箱の装飾、献血の呼びかけ、豚汁の販売などを行いました。

今年は、夏休み終わりにごみの分別方法の変更を知らされ、対応に追われることとなりました。その中でも、部署員や学生会、環境委員などたくさんの方に協力して頂き、無事に高専祭のごみを処理することができました。臨機応変に対応してくれたみなさんに感謝の気持ちでいっぱいです。

1年間、大変なことや楽しいことなど、たくさんの貴重な経験をさせていただきました。先を見通して計画通りに物事を進めることの難しさなどを実感し、試行錯誤することで自分の成長につながったと思います。来年度も、素晴らしい高専祭を創ってくれることを期待しています。

就職・進学状況

機械電気工学科の就職および進学を終えて



5年担任 機械電気工学科 教授 藤田 重隆

まず、平成2017年度の就職戦線は、各企業の求人が活発で、2016年の10月頃から企業の採用担当者が来校し始めました。最終的な2017年度の機械電気工学科への求人企業数は642社で、就職する学生が27名ですので、求人倍率は23倍を超えています。

学生には、4年生の早い時期から自分が希望する職種について、これまでの就職の会社資料を見て決めるか、担任との面談後に決定するかを連絡しました。また、4年生の12月中には就職希望先の企業を選定するように連絡しました。それは、2月末までに訪問が可能な企業の採用担当者との連絡を取り、3月中に就職を希望する企業への訪問日を決定するためでした。この企業訪問の意味は、採用担当者から会社の説明を受けるとともに、その企業に就職した高専の先輩からの仕事の内容や処遇の話聞き、試験を受けるかどうかを判断させるためでした。また企業側には、その学生がその企業にマッチするかの判断をお願いしました。その結果、学生と採用担当者の両者がOKの場合のみ、採用試験を受けさせました。しかし、見学して学生の希望する企業のイメージと違っていた場合には、別の会社を探すように伝えました。これにより、学生と企業側とのミスマッチをかなり防ぐことが出来ます。

また、同時に就職試験でのSPI試験等の対策をするように連絡しました。具体的には、就職希望の学生全員が1冊の就職試験問題対策本を購入し、お互いに貸し借りして、2冊以上はこなしておくように伝えました。

さらに、就職用の面接練習を教員にお願いし、必ず面接してから就職試験に行くように伝えました。最低でも2名の教員の面接を受けることにより、面接の受け答えに慣れることが重要です。

さて就職試験は、会社によっては2017年3月から始まり、3月中に内定をもらった企業もありました。3月中旬までに、学生が希望したほとんどの企業に就職試験関係の書類を送っていたので、試験を出来るだけ早くしてもらい、実質的には5月末で全員が決まっていました。しかし、就職試験の時期の申し合わせにより重役面接が6月以降に設定されていたため、27名全員が確定したのは6月の第1週でした。なお、第2志望の企業に回った学生数は、4名でした。

次に、最終的な進学者数ですが、専攻科進学5人と国立大学進学の6人の計11人でした。進学志望の学生には、2016年の4月の4年生になってすぐの面談で、進学希望先を聞きました。しかし、すべての学生がこの時点で進学の希望先が決まっていたわけではありませんでした。前期中にはほぼ決定しました。また、国立大学への進学希望学生については、以下の対策をするように伝えました。

- 1) 進学したい大学を3大学程度選ぶこと。
- 2) 次に、各大学の過去3年間の試験問題を早急に取り寄せること。
- 3) それらの問題を解き、出来れば他の大学の問題を学生同士で問題を融通して解いてみることでした。

高専生が編入できる国立大学の試験は、大学によって日程が異なっていますので、複数の大学を受験することが可能です。なお、自分の将来の希望職種を見据えて、大学を決定することが重要です。

また、専攻科の受験希望学生は、できれば4年次終了までに、専攻科の専門科目学力検査が免除される資格がありますので、それらの取得を薦めます。

以上、今年度の就職と進学の説明をしました。来年度の2018年度も、2017年度と変わらない求人社数があると思いますので、4年生の学生さんの希望する会社には比較的入りやすいと思います。しかし、地元だからとか、給料が良いからという理由だけで決定しないで、自分がどういう仕事をしたいかということをよく考えてから就職先を決定してください。

就職 メタウォーター (2名)、NOK (2名)、SUBARU、鴻池組、日新製鋼 (2名)、三菱ケミカルエンジニアリング、三井化学、東ソー (2名)、三菱重工 (2名)、武田薬品工業、中電プラント、日本電測機、日立製作所交通システム社、東ソーシリカ、富士高圧フレキシブルホース、日立交通テクノロジー、JXTGエネルギー、アステラック、荏原製作所、ソニーグローバルM&O、マルハニチロ、日立ハイテクノロジー

進学 東京工業大学、筑波大学、東京大学、横浜国立大学、大阪大学、広島大学、徳山高専専攻科 (5名)

体験記 1

自分の将来像を明確に

私は、高専の就職率の良さに魅力を感じ入学しました。そのため、本科を卒業後は就職すると決めていましたが、どこの企業に就職したいか4年生の12月頃まで悩んでいました。自分が本当にしたいことは何かいろいろ調べていくうちに、「人々の健康を支える」ことで社会に貢献したいと考え、最終的に武田薬品に決めました。

4年生の年明けから就職活動が本格的に始まり、2月末には求人票が届きました。その内容を確認すると、採用予定者数が思ったより少なく焦りました。私は4年生のインターンシップで他の企業に参加していたので、自分をアピールするために担任を通じて武田薬品の人事部の方と連絡をとり、工場見学とOB訪問の機会を設けて頂きました。今振り返ると、この機会が私の試験前日の不安な気持ちを払拭してくれたと思います。また、就職活動を通して一番苦労したのがエントリーシートです。志望動機はスラスラ筆が進みましたが、自己PRの箇所でかなりの時間を費やしました。ここ

機械電気工学科5年 渡辺 大智



では、今までの高専生活を通して自分が頑張ってきたことを中心に埋めていきました。そして、何度も先生方に添削して頂き約2週間かけて完成させました。

武田薬品の試験は、SPIと面接(1回のみ)で合否が決まるので、悔いが残らないよう全力を出し切ることを心がけました。面接では緊張しましたが、「何がなんでも絶対合格する」という強い信念を持って臨みました。エントリーシートの内容をただ暗記して言うのではなく、自分の言葉でいかに相手に伝えるかが大事だと思います。

これから就職活動を控えている皆さん、就職活動は自分の人生を左右すると言っても過言ではありません。高専は就職先の選択肢が広く、自分に合った職種を見つけやすいと思います。将来何がしたいかしっかり悩んで、自分の納得いく選択ができるよう心から祈っています。

武田薬品工業株式会社

体験記 2

進学を考えている後輩たちへ

私はこの度、第一志望である横浜国立大学の編入試験に無事合格しました。この結果は、多くの人の支えがあったからだと思います。

私が進学を決意したのは、4年生の前期です。私が志望校を決めるうえで重視していたポイントは、4つあります。1つ目は、自分の卒業研究の知識が活かせる大学。2つ目は、国際性が豊かで視野、交友関係が幅広く広げることのできる大学。3つ目は、自分の学力で目指せる限界のレベルの大学。4つ目は、専門科目の学力試験を行っている大学。下記になぜその4ポイントなのかを記します。

1. 進学先で何か一つでもアドバンテージを持っておきたかったから。
 2. もっといろんな人と会話をして視野を広げられたから。
 3. 限界にチャレンジしてみたかったから。
 4. 専門で得た知識をこれからは生かしたかったから。
- 以上の4つのポイントから志望校を決めました。勉強の進め方についてですが、私は図書館で編

機械電気工学科5年 村上 蓮太



入対策用の本を借りて、1回目、2回目、3回目と繰返しやることによって身につけてきました。その中で、必ず分からない問題が出てきます。そういう時は、友人、先生等に聞いて早めに解決しておきましょう。

ここからは、進学を考えている後輩たちに送ります。進学したいけど大学の選び方が分からない等で悩んだときは、私みたいに何点かポイントをあげて探すことをお勧めします。意外と、どこかの大学に収束していきますよ(笑)。後、受験期間中ほど、友人が大事だと思ったことはありません。

日常の何気ない会話でも、すごく楽しく思えます。時にはイライラをぶついたり、時には一緒に笑ったり、合格した時には一緒に喜んでくれる、皆の周りは良い人たちで溢れているはずです！

自分に負けず、皆の助けを借りながらこれからの受験勉強頑張ってください！

横浜国立大学理工学部 機械・材料・海洋系学科
機械工学EP

就職・進学状況

情報収集と自己分析から明確なビジョンを！

5年担任 情報電子工学科 准教授 柳澤 秀明



平成29年度情報電子工学科5年生は、39名（男子29名、女子10名）で、就職希望27名、進学希望12名でした。男子学生は19人が就職、女子学生は8人が就職希望でした。一部の大手企業の中には、経団連の方針に従い6月から採用活動を開始する企業もありますが、多くの企業では高専生の採用活動を3月から開始していました。このため、就職希望の学生に関しては、ほとんどの学生が6月中旬までに内定を頂いていました。

本年度の求人数は、昨年度より若干増加し、約554社となりました。私が企業の人事担当者と面談した回数は、100回を超えました。多くの人事担当者から徳山高専の学生が高く評価されています。これまでの卒業生が企業に入社し頑張っているおかげだと思います。

今年度の就職・進学活動に先立ち、学生には進学か就職かの判断を4年生の前期中に選択するように伝えました。特に進学の希望が明確な学生に対しては、なるべく早く希望大学の過去問を取り寄せるように伝えました。また、就職希望の学生には、冬休み前までに第一希望の企業を決めるように伝えました。しかしながら、最終的に第一希望の企業を決めた時期は、1月になってからの学生も多かったように思います。

就職希望者27名のうち学校推薦で応募した学生は24名でした。学校推薦で応募した学生のうち19名が第一希望の企業に内定を頂きました。また、自由応募で応募した学生3名も第一希望の企業に内定を頂きました。自由応募も含め、1社目で内定を頂いた学生の割合は、81%となります。

今年度の就職活動は、3月からエントリーの受付を開始する企業が多く、エントリーした学生に対し工場見学や適性検査等の日程を個別に設定してもらえることが多かったように思います。つまり、早めに準備をすすめることで、就職活動を早く終わりにすることができたということです。

しかしながら、余裕を持ってエントリーできた学生は、それほど多くありませんでした。理由は、「志望動機」や「自己PR」をうまくまとめられず、提出期限が近づき、やっと完成させていたからです。企業にもよりますが、応募の手続きを行ってから1週間程度で面接を行うこともあり、慌ただしく面接試験に臨んだ学生もいました。幸い多くの学生が第一希望の企業から内定を頂きましたが、

早めに準備をしていれば、もっと落ち着いて面接試験を受けられたことと思います。全ての学生の就職先が決まったのは、8月上旬でした。

一方、進学希望者は2名が推薦応募、10名が複数の大学で学力試験を受けました。編入学試験の日程・試験科目は、各大学が独自に決定しています。そのため、試験日程が異なれば、何校でも受験することができません。ただし、試験問題は大学毎に異なるため、なるべく早く情報収集し、傾向を読み取り、対策を立てる事が大切です。

今年度の就職・進学活動を振り返ると、就職するにも進学をするにも、自分が将来、何をしたいかという明確なビジョンを持つことが大切だと思いました。明確なビジョンを持つためには、情報収集と自己分析を行うことが必要です。これらを早めに行うことで志望動機や自己PRに繋げられると思います。

就職 富士通、富士通エフサス、富士通九州ネットワークテクノロジーズ、富士通九州システムサービス、富士通アプリケーションズ、矢崎総業、東ソー・情報システム（2名）、日本電測機、ニプロ、パナソニックシステムソリューションズ ジャパン、NTTコム・エンジニアリング、NTTコムソリューションズ、三菱電機名古屋製作所、JR東海、マツダ、JXTGエネルギー、東ソー・ハイテック、KDDIエンジニアリング、ソシオネクスト、キヤノン、オムロンソーリアルソリューションズ、NHK、あさひ製菓、アドウェイズ、国立印刷局、ナレッジスイート

進学 徳山高専専攻科（3名）、九州大学工学部、九州大学芸術工学部（2名）、広島大学工学部（3名）、山口大学工学部（2名）、立命館アジア太平洋大学

体験記 3

就職活動を経験して

私は高専に入学した当初から卒業後は就職を考えていました。就職先について具体的に考え始めたのは4年生の後期からですが、自分がどんな仕事をしたいのか3月になっても就職先を絞れずいました。そんな時、高専生のための合同会社説明会が行われていると知り、参加することにしました。様々な企業の説明を聞いていく中で、私は人々の生活を支える社会システムを作りたいと強く思っていることに気づき、駅の改札機や交通システムなどの社会システムを創造している、オムロンソーシャルソリューションズ株式会社を受けることを決意しました。

周りよりも一足遅く就職活動をスタートした私は、履歴書を作成したり、Webテストや面接練習をしたりなど慌ただしく試験本番を迎えることとなりました。初めは緊張しましたが、無事面接を終え、内定を頂くことができました。

就職活動を振り返って、『研究』することが1番重要だと思います。企業研究ももちろんですが、

情報電子工学科5年 藤山 あかり



- 自分の歩んできた過去、現在、未来
- についてしっかりと考え、そこに企業を結び付けることで自分の中で整理する事が出来ると思います。
- そのような自分自身についての研究が、履歴書や面接の軸になっていくと思います。もし、過去の経験が少ないと感じたら、今からすぐに授業や趣味などどんな事でもいいので積極的に取り組んでみてください。沢山の経験の引き出しを用意することで自信に繋がっていくのだと思います。
- これから就職活動される皆さん、早い段階から就職活動に取り組んでください。自分の興味のあることを見つけ、企業研究を行い、後悔のない選択をしてください。そして、しっかりと準備をし、笑顔で自信をもって面接や試験に臨んでください。皆さんが実力を発揮できることを願っています。

オムロン ソーシャルソリューションズ株式会社

体験記 4

大学への「想い」を大切に

中学生の頃、私は普通の高校では学べない技術を身につけたいと考え高専に進学しました。実際、高専で、私は数多くの技術を得ることができ、とても楽しく毎日を過ごすことができました。そして、4年生になって将来のことについて考え始めた頃、進学か就職かを定めることになり、私は迷わず進学を選択しました。なぜなら、高専で得たこと以上の技術を大学では学ぶことができ、その技術を得たいと強く感じたからです。「大学ではどんなことを学び、経験できるのだろう」と思っていたことを今も覚えています。

しかし、その思いの反面、進学先はなかなか決まりませんでした。似たようなカリキュラムの大学が多くあり、決め手がなかなか見つからなかったのです。その結果、気持ちがなかなかまとまらず、受験勉強を始めたのも年が明けてしばらく経ってからになってしまいました。

そのような状況の中、進学先について研究室の先生と話しているとき、九州大学に先生の知り合

情報電子工学科5年 山縣 将貴



- いの教授がいらっしゃるという話を伺いました。その教授がどのようなことを研究しているのかという話を聞き、また、自分で調べる内に、九州大学で学びたいという思いが強まりました。
- 気持ちが決まってからは、編入試験に向けて集中して勉強を開始しました。九州大学工学部は今年から推薦入試を行うとのことで、口頭試問で問われる数学、物理とTOEICの点数を伸ばすことを目標に勉強を進めていきました。
- 試験当日は、それほど緊張することもなく、面接で言いたかったことは全て言い切り、とても清々しい気持ちで面接室を出ることができました。
- 受験勉強をする上で大切なのは、なぜその大学に行きたいのかという強い気持ちだと私は考えます。これから進学を目指す方々は、その大学への「想い」をなるべく早く見つけて準備を進め、全力でその想いを大学にぶつけて欲しいと思います。

九州大学工学部電気情報工学科

就職・進学状況

希望した進路に向け努力する



5年担任 土木建築工学科 教授 原 隆

平成29年度の土木建築工学科5年生の卒業予定者は38名（男子27名、女子11名）です。全員38名の進路が決定しており、内訳では就職については民間企業が24名、公務員5名、進学では専攻科2名（推薦2名）大学編入が7名です。

私は前任の教員からの引き継ぎで就職・進学を担当したため、4年次から始まった就職活動の最後の場面に立ち会ったようなものですが、面接の練習を通じて学生に業界への知識を伝えることができたと思います。各進路先の状況と特徴を記述します。

【民間企業】施工管理が7名、設計業務が5名、住宅関連が3名、エネルギー・インフラ関係が4名、営繕5名という状況でした。就職希望者の多くがインターンシップを経験し、就職につなげた学生が多く見受けられました。電力、ガス、鉄道のインフラ系はすべて女性、工場構内の営繕関係に5名就職したのが本年の特徴です。また、公務員を含め16名が県内事業所に就職したのも例年にない傾向でした。

【公務員】公務員は国家公務員1名、地方公務員4名でした。新規採用に関して民間企業との接触が早くなった関係で、採用試験が1週間程度前倒しになったことと、定年退職者が多く、どこの官庁も職員採用が困難になっていたため、官庁が学校に志願者を勧誘に回るという、少し前では考えられない状況でした。また、市町村では、高専の卒業予定者に従来の高校卒ではなく、大学卒を作るなどの改善が見られたため、地方公務員の希望者が増えたのが特徴です。しかし、公務員は最終合格発表が7月末まで伸びたため、地元民間企業に志望変更する学生も数名いました。公務員希望者は工学セミナーの進路指導や春休みを利用した勉強会で実力をつけ、5名すべてが大学生に交じって受験し、全員が大学卒で合格しました。高校卒卒でのみ受験できる県庁志願者がいなかったのも本年の特徴です。

【大学進学】9名のうち、専攻科2名、大学3名の5名が推薦、残り4名が選抜試験で合格しました。専攻科、大学編入は4年次の成績と英語の検定試験（TOEIC等）を課す大学が多いので、推薦を希望する学生は成績（席次）を上位にすること、英語の勉強に力を入れなければなりません。勉強したい学問を決めて努力することが大切であると思います。

【卒業生に伝えたいこと】 本年はよい条件で就職

に臨めたと思います。その理由は、これまでの卒業生のそれぞれの職場での努力により大学、高専卒を超えての高専卒業生の評価が高くなっていることに尽きると思います。新卒業生には高みを目指して、自分のため、後輩のため奮闘してほしいと願っています。

【在校生に伝えたいこと】 就職活動をお世話させていただいて感じることを2点紹介したいと思います。

一つは業種を研究し、将来の夢を明確にすることです。どのような業種においても、技術系の求人は多く、採用活動が早くなっています。「高専だより」をお読みになるころは新5年生の就職活動は本格的になっていると思います。徳山高専で行われるキャリア教育プログラムや工学セミナーを利用した進路別指導、放課後や休日に行われる企業紹介に積極的に参加して進路先を考えることです。教員の方に相談して企業団体の業務内容が自身の希望に合っていることを確認して進路を決めることも大事です。4年生では、インターンシップで実際の業務を体験してみるとよいです。また、Web情報に頼らず、新聞報道に注意し、業界の動向を知ること大切です。マスコミで報道されている大学生の就職活動の状況は全く無縁です。将来の夢に近づける進路を選択することをお勧めします。

二つ目は「私は学校でこんな体験をしました」と自信を持って言えるものを持ってください。クラブ活動、学生会活動、ボランティア活動、海外体験など。自信を持って言えるものがあることは大なり小なり「成功体験」を持った人です。何でもよいですから「やりきった」と思えることを体得してください。

最後に、挨拶、返事、身だしなみはベースラインです。日ごろから自然にできるように注意しましょう。

就職 財務省、周南市（3名）、岩国市（1名）、井森工業、関門港湾建設、銘建、安成工務店、巽設計コンサルタント、サンワホーム、しらい、乃村工藝社、大林組、竹中工務店、JR西日本コンサルタンツ、CMエンジニアリング、JR東海、東京ガス（2名）、中国電力、NTTインフラネット、前田道路（2名）、TOTO、三井化学、日本ゼオン、日本精蠟、東ソー

進学 徳山高専専攻科（2名）、千葉大学（3名）、熊本大学（2名）、熊本県立大学、玉川大学

体験記 5

インターンシップと就職活動

土木建築工学科5年 原田 賢太

私は株式会社竹中工務店に就職することになりました。この会社を選んだ理由としては建築という分野に興味を持つきっかけとなったヤフオクドームを施工した会社であることと、建築專業で高い建築の技術を持っていることです。中学生のときから野球が好きで、何度もヤフオクドームに足を運んでいました。柱がなく作られている大空間に何万人もの人が入っていることを不思議に思い、自分もヤフオクドームのような大きな建物を作りたいと考えるようになりしました。4年生の時には、インターンシップで竹中工務店の広島のホテル新築工事の現場に参加させていただきました。そこでは普段入ることのできない工事現場の中に現場を体験できたことはとても良い経験でした。一週間という短い期間でしたが目の前で建築物ができていく様子を見ることができました。現場では、社員さんが職人さんとコミュニケーションをとりながら、良い建築物を作るために走り回っていました。また、仕事へ熱い情熱を持っている人

が多かったことも印象に残っています。その姿を見て、自分も現場に出て働きたいと考えるようになりしました。この会社に入りたいという目標はあったのですが、具体的に何がしたいのかがはっきりしていなかった私には、目標を明確にすることのできた良いインターンシップでした。私も現場で見た社員さんのような熱男になって、現場で活躍したいと思いました。4月からは新社会人として、努力をして少しでも社会の役に立てるようがんばっていきたいと思います。

株式会社竹中工務店



体験記 6

努力は人を裏切らない

土木建築工学科5年 河口 みのり

私はこのたび、第一志望の千葉大学へ進学することが決まりました。就職・進学のどちらを選択したときにも困らないようにと、入学当初から勉強に力を入れてきましたが、徳山高専で学んだことをさらに高め、またさらに高度な知識を身につけたいと思ったことが、大学への進学を決めたきっかけです。

4年生の秋まで学生会の活動をしていたこともあり、編入試験に向けて本格的に勉強を始めたのはその年の12月頃からでした。各大学の試験の過去問を取り寄せてみると、大学によって試験科目や出題される問題の傾向が異なっており、それらを全て一から復習し直すことから始めました。しかし試験までの日数が限られている中、それを実行するのは簡単なことではなく、ただ黙々と勉強を重ねる毎日でした。気づけば周りには進路活動を終えた友人ばかりで、焦りから、なかなか勉強に手がつかない時期もありました。

面接試験や筆記試験などは、いずれも試験当日

に自分の持てる全ての実力を発揮することが重要ですが、それを支えるのは紛れもなく、これまでの自分の努力の積み重ねです。私自身、試験当日は今までにないほど緊張していましたが、これまでに受験勉強に励んできた日々が思い出され、不安は合格に向けての自信へと変わりました。「合格」という目標に向かって続けてきた努力は決して無駄なことではなく、確実に自分自身の力になっていたので感じた瞬間でした。可否を自分で決めることはできませんが、勉強をどれだけ頑張るかは、自分でいくらでも決めることができます。受験勉強は自分自身との戦いです。辛いこともたくさんあるかと思いますが、夢を諦めずに最後まで頑張ってください。私の経験が、これから大学進学を目指す皆さんにとって少しでも助けになればと思います。

千葉大学

就職・進学状況

大学・大学院ウィークの導入

機械制御工学専攻幹事 機械電気工学科 准教授 三浦 靖一郎

今年の機械制御工学専攻の求人社数は昨年度と同様に500社を超えました。大企業の景気状況や技術者不足という社会背景も重なり、高専卒業生・専攻科卒業生の入社を希望する企業が増えていると感じます。このように感じる背景として、冬季休業・春季休業を利用した工場見学や会社見学を企画する企業の増加が挙げられ、一昔前を思い出すような企業PRが展開されつつあります。

この状況の中で、本年度の機械制御工学専攻修了予定学生3名のうち、2名は大学院進学希望、1名は民間企業就職希望でした。進学希望の学生は、当初専門分野の選択が漠然としていましたが、研究室の情報収集や見学などを通して徐々に整理を行い、偶然にも同じ大学院の同じ研究室に合格しました。

就職希望学生は、専攻科1年次の長期インターンシップでお世話になった企業の親企業を第1希望とし、万が一に備えて第2希望として同業種の企業を自由応募で受験しました。十分な事前準備を行っていたため第1希望の企業で早々に内定をいただきました。第2希望の企業も同様で、専攻科生は大学学部生と同等以上であることを示してくれました。

進学・就職の両面から言えることは、企業のみ

ならず大学院においても、専攻科生の動向に注目しているということです。例年、次年度進路選択をする専攻科1年生向けに開催している大学院説明会（参加学生15名程度）も、大学の先生方にご来校いただいているのに、説明会のみではもったいないと思い、今年度から全学生対象とした大学説明+研究紹介という形に変更しました。6大学6名の先生にお越しいただいた今年度は、延べ100人超の学生、30名超の教職員の参加があり、大盛況に終わりました。

ご来校いただいた先生方によると、このような形式は初めて（高専初!？）であり「もっと徳山で話したい!」というご意見を多数いただき、双方にとって有意義なものとなりました。従来の取り組みに新しい視点を与えることで、新しい価値を見出せることに改めて気づき、私たちが小さな工夫をすることで、高専生の視野や進路選択の幅が広がればと願っています。

就職・進学先 九州工業大学大学院（2名）、オムロン株式会社（1名）

就職・進学試験体験記

体験記
7

一度きりの人生、様々な挑戦と経験を

機械制御工学専攻2年 竹島 功祐



私は本科4年生の冬まで就職活動をしていました。当時の私は、本当にやりたいことは何なのか、学生生活でやり残したことはないのか、学んだ知識でどう社会に貢献するのか、自分の特長に自信を持てるのか、などと悩んでいました。そして悩みに悩んだ末、その答えを見つけるために専攻科進学に進路変更しました。

その後は、専攻科での就職活動を見据え、「技術力の実践・様々な人との関わり・レアな体験」をテーマに、様々なことに挑戦し、経験を積んできました。その一環として、社員の大半の方が障害を持つオムロン太陽株式会社への長期インターンシップに参加させていただきました。

この会社を選んだ理由は、オムロン株式会社に興味があったことに加え、治具製作（技術力の実践）や初の一人暮らし（レアな体験）ができ、障害のある方々と接すること（様々な人との関わり）で日頃見えない新たな発見があると考えたからです。この体験を通して、新たな発見や多くの学びがあ

り、非常に有意義な時間を過ごすことができました。この他にも、とにかく自分のやりたい様々なことに挑戦した結果、自分の特長や将来の夢が明確になりました。

そして、就職活動では、オムロン株式会社とテルモ山口株式会社の面接を受け、自信をもって自分の考えを伝えることができました。その結果、第一志望の会社で、さらに、周りは名門の大学院生ばかりの部署に内定を頂くことができました（テルモ山口株式会社は最終面接で辞退）。両社の就職活動を終えて感じたことは、目標を決め、それに向かって行動した背景とそこから何を学んでどう活かしたかが、重要だと感じました。

一度きりの人生、様々なことに興味を持ち、挑戦することが大事だと考えています。それがどんなことでも、就職活動や将来に必ず生きてくると思います。本当にやりたいこと見極めて、自分の目指す道を歩んでほしいです。

オムロン株式会社

就職・進学状況

進路の開拓は自分自身の適性を見極めて積極的に



情報電子工学専攻幹事 情報電子工学科 教授 高山 泰博

今年の情報電子工学専攻2年生は、1名の休学者を除いて8名が進路選択を行いました。そのうち、5名が就職し、3名が大学院に進学します。

就職では、いずれも学校推薦の形はとりましたが、就職先の企業を自分で見つけてくる学生が複数いたのが今年度の特徴です。就職先は、情報系のソフトウェア専業会社、自動車部品メーカ、光学機器メーカ、大企業の情報系システムのサポートを中心とする会社、電子デバイスシステムメーカとバラエティに富んでいます。うち2名は専攻科1年次のインターンシップ先を就職先に選びました。

進学では、3名とも大学院大学（同じ分野の学部を直接には持たない大学院）を進路に選びました。うち2名は、専攻科1年次のインターンシップ先に進学します。自分が学びたい研究領域や自己の適性を見極めて、近年には専攻の先輩が進学していない大学院を進学先として選ぶ学生がいることが進学における今年度の特徴です。

なかには専攻科進学当初の希望を進学から就職

へ、就職から進学へと変更した学生もいますが、将来自分がどういう方向へ進むべきかを専攻科で学びながら十分に考えた結果です。半数の学生は専攻科1年次のインターンシップが直接進路に結びついています。

今年度は、学生自身が就職先の企業を探し出したり、大学院の研究室をインターンシップや研究室訪問で詳しく調べたりしながら、自分で進路を開拓・選択してくれました。このように進路状況は好調ですが、今後も自分で納得する形で切り拓いた進路へと進んでいって欲しいと思います。

就職 株式会社ディアイティー、株式会社ヒロテック、株式会社ニコン、東ソー情報システム株式会社、株式会社日立ハイテクノロジーズ

進学 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科、北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科、早稲田大学大学院情報生産システム研究科

就職・進学試験体験記

体験記
8

就職活動体験記



情報電子工学専攻2年 垣元 宏太

私は元々本科で卒業して就職しようと考えていました。しかし、当初はここに就職したいといった企業があるわけでもなく、自分が何をしたいのかもわからない状態でした。そこで、2ヶ月の長期インターンシップを体験できる専攻科に進学し、再度自分を見つめ直そうと思いました。

専攻科入学後はうっすらと地元の企業に就職できたらいいなと考えていたため、長期インターンシップでは日立ハイテクノロジーズの笠戸事業所にお世話になることになりました。そこで実際のプロジェクトに参加させていただき、生の現場を体験することができました。

インターンシップ後は、本格的に企業研究をはじめ、企業説明会へも積極的に参加しました。しかし、就職活動を進めるにつれてインターンシップでお世話になった日立ハイテクノロジーズの皆さんとまた仕事がしたいという思いが強くなり、日立ハイテクノロジーズへの就職を決意しました。

就職を考えている皆さんへのアドバイスとして、

- 実際に現場を見てみることをおすすめします。冬の期間でもインターンシップを開催している企業はたくさんあります。そういったイベントに自分から積極的に参加してみてください。
- 現場を見ることで求人票に書かれていること以上の魅力が発見できるのではないのでしょうか。就職試験で苦労したのは面接です。元々しゃべりは得意ではないので、その分自己分析を徹底的に行いました。自己分析を行う際は、自分だけでなく友達や先生の意見も聞いて、客観的に自分を分析することをおすすめします。

● 就職活動や進学の勉強をはじめるとに早すぎるということはありません。できるだけ早く行動して自分に自信をつけてください。みなさんの今後のよりよいものになることを願っています。

株式会社日立ハイテクノロジーズ

就職・進学状況

アベノミクスによる好況を背景に

環境建設工学専攻幹事 土木建築工学科 准教授 目山 直樹



安倍政権の建設分野での取組みで、あまり知られていないのは、海外での建設投資を喚起し、わが国の建設産業でミッションを組んで海外建設受注を増やそうとしていることである。いまや、新人がいきなり、海外の現場に飛びたつ時代になろうとしている。高専の側もそれに対応しうる人材供給の場として、プログラムを充実させてきた。

震災復興にともなう基盤整備需要、合併特例債による堅調な公共投資、東京オリンピックを背景とする公共建築はじめ各種のプロジェクトの喚起など、土木・建築分野において、堅調な建設需要が続いている。

専攻科生は大学生と同様に、自由応募を基本としているものの、高専専攻科に対する高評価が定着してきたためか、企業側が途中から学校推薦を申し出るケースもあり、大学生の就職にみられるような熾烈さはないようにも感じられた。

このような状況を受けて、民間就職希望の学生たちは、早々と内定を取り付け、この春、エンジニアの卵として巣立とうとしている。また、公務

員受験組も順調に合格の報を手にし、公共サイドの技術者の卵として巣立とうとしている。大学院進学組も推薦入学等で早々と結果を得て、このあとの学びに期待を膨らませている。

今年度修了予定者も順調に進路を決め、春に学業を終え、社会に、次の学びの段階に、送り出す準備をしている。

次年度も多くの進学者を迎える予定であり、高専専攻科の教育・研究がますます充実していることを実感している。学生ならびに保護者のみなさまに、ぜひとも、専攻科進学を検討していただきたい。

就職・進学先 宇部興産機械（2名）、周南市役所（土木職上級）、防府市役所（土木職上級）、山口県庁（土木職上級）、愛媛大学大学院、熊本大学大学院、東京大学大学院

就職・進学試験体験記

体験記
9

公務員試験を経験して

環境建設工学専攻2年 原田 哲志



私は本科5年の時から地方公務員を目指し始めました。専攻科に進学した理由はもちろん大学卒業程度の資格を得るためですが、それ以外にも研究やインターンシップなど学生にしか出来ない経験をしてみたかったからです。専攻科のインターンシップでは市役所と県庁にそれぞれ1カ月ずつお世話になりました。職場の業務を間近に見ることで、社会に求められるスキルを知ることができ、自分が将来どのような業務に就くのかイメージしやすくなります。専攻科に進学する強みの一つは、インターンシップの経験をその後の勉学や就職活動に活かすことが出来ることだと思います。

公務員試験は基本的に筆記試験、小論文、面接が行われます。私は2つの市役所と国土交通省を受験しましたが、どの団体でもその構成に大きな違いはありません。しかし、小論文や面接の内容はその地域の文化や特徴を主題とした質問が取り上げられることが多いです。例えば、「～市の問題点について、専門的な観点からあなたの意見を述

べてください」というような感じで、公務員は業務のイメージから客観的な意見だけが重視されるように思われがちですが、面接では客観的な事実に基づきしっかりと自分の意見を述べるのが求められます。ですから、普段からその地域の文化や特徴を調べ、自分の意見を持つておくことが大切です。もし自分の意見に不安があれば、その分野の専門家である先生たちに意見を求めると良いと思います。

公務員試験を複数受ける場合は、短時間で何度も試験を受けることになり、想像以上にスケジュールが立て込みます。受験対策として、早め早めに準備を始めることをお勧めします。全ての進学・就職活動に言えることですが、努力を怠らず積極的に行動することができれば、きっといい結果につながると思います。みなさんの進路希望が叶うことを心から願っています。

防府市役所（上級・土木職）

それゆけ元高専生

機械電気工学科 第36期卒
東京大学大学院 修士課程1年
茂山 丈太郎

徳山高専を卒業したあの日から、もう4年が経とうとしています。とは言え、徳山高専での5年間の方がずっと長く感じられ、あの頃はかなり充実した日々を過ごしていたんだなあという気持ちになります。

私は卒業後、東京大学の機械情報工学科に進学しました。高専で機械設計を学ぶ中で、情報工学やヒューマンインタフェースと言った領域に興味湧き、引き続き研究に取り組めたらいいなという思いから編入学試験を受験し、無事希望の研究室に大学院まで進学することができました。現在は大学院学際情報学府に進学し、この記事はいまドイツ・ベルリンの研究インターン先で書いています。

大学の機械系の授業はどれも理論を重視した物が多く、一度高専で学んだことをサイエンス寄りの視点からもう一度俯瞰することができました。高専生にとって大学の授業を受けることは、工学的なセンスだけではなく科学的なセンスを身につける良いきっかけになるかとも思います。高専での学びがアドバンテージになることも多く、自分の好きだった流体力学の科目の試験対策委員を勤めたことが発端で、学科内での知り合いが多くできたということもありました。また専門外の授業を自由に受けることもでき、工学に限らず更に視野を広げる事もできました。授業のレベルに関しては、高専でしっかり勉強していれば大学でも全く問題ないと思います。最初はかなり不安でしたが、意外となんとかなるものです。

大学では周りの学生の志が非常に高いこともそうですが、そこら中の先生が世界的に有名であるということでも多くのメリットを受けられるようにも思えます。そういった先生方との論文執筆や学会発表などの経験が得られることは、まさに最先端研究の醍醐味ではないでしょうか。

大学院に進学してすぐにドイツの大学で研究インターンに取り組んでいます。高専在学時代から海外で本格的に学びたいと志していたので、ようやくひとつの夢がかなったという喜びを感じています。世界各国から優秀な研究者が集まるトップレベルの研究室での日々は非常に刺激的で、世界

はまだまだ広いと痛感させられます。今後も精進あるのみ、と言った感じです。

ここで、あらゆる将来を志す我が徳山高専の後輩のみなさまに、あえて幾つかアドバイスを残したいと思います。ただあまり真に受けないようにしてくださいね(笑)

第一に、英語の勉強を欠かさないことです。言うまでもありませんが、大学内外問わず、進学先で研究したり、就職先で海外主張に出たりする際には必須スキルです。高専のスケジュール内でうまく取り組めば、3年次までにTOEIC900を突破することも十分可能です。高専特有のありあまる時間を上手に使って、可能な限り最大の努力をしてみてください。第二に、座学と実践両方に真剣に取り組んでください。高専の授業は大学の講義と遜色ないレベルの高いものばかりです。他方、演習などで手を動かす機会も十分ありますが、十分に多いわけではありません。ロボコンやデザコン、情報オリンピックといった課外活動に積極的に取り組んで、頭脳だけではなく技能も鍛えてください。特に低学年の頃から課外活動に積極的に取り組むのは重要だと感じます。

最後に、先生方との時間を大切にしてください。授業や卒業研究で先生と時間をともにすることも多いと思いますが、大学レベルもしくはそれ以上のリソースを活用できる貴重な時間です。どんな些細な疑問でも先生を直接訪れて話をするのが重要だと思います。

現在、大学も企業と同様に高専生を積極的に受け入れるようにしており、大学による高専生の需要も非常に高く、売り手市場といえます。特に先に述べたスキルをきちんと身につければ、大学でも大いに活躍できるのではと思いますので、興味のある学生は積極的にチャレンジしてみてください。興味のある大学があれば、まずは研究室インターンやアルバイトに応募してみたいでしょうか。

先生方におかれましては、引き続き将来と野心のある徳山高専の学生達に、潤沢な学びと実践の場を提供して頂ければ幸いです。最後になりますが、徳山高専の今後ますますのご発展をお祈り致します。

社会人生活30年を振り返って

情報電子工学科 第7期卒
(株)日立ハイテクノロジーズ
笠戸地区設計・生産本部
坂口 正道



今年の4月から、日立ハイテクノロジーズ笠戸地区（下松市）の本部長を務めております。私は、高専卒業後エンジニアからスタートし、転職も経験しました。また、部門長、経営者と、社会人生活の転機を振り返り、私の経験が少しでも皆さんのお役に立てればと思い、今回高専便りへの寄稿をお受けさせて頂きました。

◆ 会社紹介

日立ハイテク（東証一部）は、日立系の商社だった日製産業（東京都港区）と、日立製作所の計測器グループ（茨城県ひたちなか市）、半導体製造装置グループ（山口県下松市）が事業統合して2001年にできた会社です。笠戸地区では、半導体デバイスを製造するために最も重要なエッチング（微細加工）装置の開発、設計、製造を行っています。

職場は、日立製作所笠戸事業所の敷地内にあります。外部から見えないため知名度は低いのですが、約600人の人員で、世界中の大手半導体デバイスメーカーに装置を納入しており、皆さんが日常で使われているパソコン、スマートフォンには弊社装置で製造された半導体デバイスが搭載されています。

◆ 社会人生活を振り返って

私は、1985年に徳山高専を卒業し、関西の半導体デバイスメーカーに就職しましたが、家庭の事情によりUターンで山口に戻って来ました。その時に奥本先生のご紹介で、1989年、日立笠戸グループの設計支援子会社に転職することができました。この時、親身になってご相談に乗っていただいた奥本先生と徳山高専の先生方には今でも大変感謝しております。

当時、日立笠戸の半導体製造装置事業は萌芽期であり、半導体デバイス設計を経験していた私は、グループ会社社員の立場（日立グループの事業再編等で2007年日立ハイテクに転属）ではありましたが、様々なビジネス経験を与えて貰えました。

国内外のお客先への長期出張、開発担当した装置の不具合対応等、今思えば苦勞した思い出も沢山ありますが、与えられた機会を達成した時の充

実感、また、その後新たな機会を与えて貰えたときのワクワク感の繰返しが社会人生活の礎だと考えています。また、そのような機会を与えてくれた上司や先輩方に感謝し、私自身も部下や後輩に同じような経験をさせてあげたいと考えながらエンジニア生活を謳歌していました。

私は、現場での泥臭い仕事が好きで、エンジニアで定年を迎えると思っていました。しかし、2009年リーマンショックによる事業存続の危機により状況は一変。事業存続のための製品、お客様の集中と選択を柱とした事業改革が断行され、その時、私が担当していた製品、お客様に集中することになりました。色々な事にチャレンジした結果、我々の事業はV字回復することができ、2013年に設計部長を拝命しました。

「部門で最大の成果を出す」「部員のレベルを底上げする」ことが部長のミッションです。当然、管掌範囲が拡大するに併せて責任も重くなります。今までのように、ひとりで全てできるわけではありません。

私は、エンジニアの経験しかなかったため、マネジメント試行錯誤を繰返ししながら、色々な人と会話して信頼できる仲間を作り、大胆に権限を委譲することを常に心掛けてきた結果、今年4月から現職となりました。

私はよく先輩から、ラッキーボーイと呼ばれていました。しかし、成功する人（チーム）、失敗する人（チーム）には、それぞれ理由があると思います。

私が業務を遂行する上で常に心掛けていたことは、

- ① 業務上の約束は必ず守りウソはつかない
- ② チームで最大のアウトプットを出す
- ③ 成果はチームであり個人ではない

です。社会人生活は、如何に信頼できる仲間を作れるかが重要だと思います。私は良い仲間恵まれてラッキーボーイになったのだと考えています。

「人とのつながり」

土木建築工学科 第35期卒
環境建設工学専攻 第19期修了
周南市役所
藤田 恵未

私は、平成25年に本科を卒業した後、専攻科に進学し、平成27年に周南市役所に入庁しました。

ここでは、私が市役所に就職したきっかけ、仕事内容、仕事のやりがい、社会人となる上で大切にしてほしいことなどについてお話ししたいと思います。

私は、生まれ育った周南市に貢献できるような仕事につきたいと思っており、専攻科の時周南市役所に1ヶ月間インターンシップに参加させてもらえる機会がありました。研修期間中に市民の様々な要望に応える市職員の活躍を見ることができ、「自分も市民に一番身近な土木技術者として、周南市を安全でより住みやすい町に変えていく仕事に携わりたい」と思ったことが市役所に就職したきっかけです。

私が、最初に配属された課は区画整理課というところで、都市計画道路の新設工事、道路改良工事、現道拡幅の関係で、信号機・感知器の移設工事などの発注・管理を担当しました。そして、就職して三年目に道路課に配属され、道路補修工事、道路詳細設計の業務委託などの発注・管理を担当し日々奮闘しております。どちらの職場でも、(1) 工事の設計や積算、現場管理、(2) 現場周辺の住民への説明・交渉、(3) 関連機関への工事説明・調整が主な業務となります。

特に土木技術職では、配属先が多く都市整備、道路、河川、農林、水産、上下水道などの様々な業務に携わることができ、これらはどれも市民の生活に隣り合った業務内容となっています。

自分が設計をし、工事を発注したものが形として残り、市民が快適に過ごせるような街づくりに繋がる場所にこの仕事の一番のやりがいを感じます。

仕事を進める上で、どの段階においても予期せぬことが突然発生し、様々な困難がやってきます。

その問題をどんなときもあせらず真剣に取り組

み解決していき、最終的な形となり完成したものを市民の方が利用されている姿を見たときが大きな喜びとなります。

社会人3年目の私ですが、これから社会人となる皆さんに一番伝えたいことは『人とのつながりを大切にすること』です。

仕事を始めた当初、さまざまな仕事をする中で、上司・先輩方だけでなく施工業者等工事関係者など、多くの方に親身になってアドバイスやご指導していただきました。仕事で携わった人たちのお陰で、一つ一つの仕事を覚え自分の成長につながっていると思います。これから仕事をする上で多くの人々との出会いがあります。人とのコミュニケーションを大切に、たくさんの『つながり』を広げていってほしいと思います。

この『つながり』は仕事だけではなく、プライベートでも同じことが言えます。

徳山高専でできた『つながり（友達）』は卒業してからも大切にしてほしいと私は思います。学生生活を5年や7年も共に過ごしてきた同志です。高専の時の友達に会うと学生時代を思い出し、自分が自分らしくいられて楽しい時間を一緒に共有することができます。

趣味を共有できる友人、悩みを相談できる友人、そんな友人がいるだけで人生を豊かにしてくれると思います。

これからの岐路に立たれる皆さんへ。

就職、進学と大変な時期だと思います。これから仕事でもプライベートでもたくさんの人との『つながり』があると思います。どの環境においても、自分から歩み寄り相手への気遣いや思いやりを言葉と行動で示すことで、常に人に恵まれ良い人間関係を築くことができると思います。

是非、人との『つながり』を大切にしていよいよ人間関係を築いて下さい。

皆さんのご活躍応援しております。

徳山高専同窓会「高城会」より

高城会では、会員相互の親睦と母校の発展に寄与することを目的として活動を行っています。保護者の皆さまと卒業生の皆さまに、この1年間の活動を紹介します。

高城会理事長 張間 貴史 (ME15期)

① 2017年3月 会員用Webサービス“Bikita (ビキタ)”運用開始

高城会が名簿管理業務を委託している小野高速印刷株式会社が提供する会員用Webサービス“Bikita”の運用を開始しました。卒業・修了された会員全員にIDとパスワードを発行しておりますので、是非アクセスしてください。アドレスは、「bikita」「徳山高専」のキーワード検索ですぐに見つかります。

なお、郵送による高城会からの情報発信は、運営コスト削減のため順次廃止していく方針です。改めてBikitaへのご登録をお願いいたします。



<https://www.bikita.jp/class/index.php?cl=0f2b47>
Bikitaの高城会トップページ

② 2017年8月 高城会名簿の再編集作業終了

高城会では、2012年から小野高速印刷株式会社に名簿管理業務を委託しています。その後は1年ごとに卒業生・修了生を追録してきましたが、5年経過した2017年4月から名簿管理情報の再確認と再編集作業を行ってきました。

リニューアルされた名簿は2017年12月に発行し、注文された会員の皆さまに届けられました。



平成29年度版リニューアル後 高城会名簿の表紙

③ 2017年11月 理事会、総会を開催

高専祭の開催に合わせて11月4日(土)に理事会と総会を開催しました。理事会への出席理事は18名で、以下の事項について審議しました。

- ・平成28年度事業・会計報告(※高城会の会計年度は8月1日～翌年7月31日)
- ・平成29年度事業案・予算案
- ・高城会会則改正案
- ・高城会40周年記念事業



理事会の様子

総会は28名の出席で開催されました。田村理事(CA01期)が議長に選出され、理事会での審議事項の報告ならびに会則改正案が了承されました。会則の改正に伴って新設された副会長と副理事長も紹介されました。

なお、理事会と総会の詳細については、先にご紹介したBikitaにて報告しておりますので、ここでは割愛させていただきます。



総会の様子

④ 2017年11月 ホームカミングデー支援

徳山高専総合企画室主催のホームカミングデーが、高城会総会に引き続いて開催されました。前教務主事の田村先生から「徳山高専の創立から40年を振り返って」と題したご講演をいただいた後、懇談会に移り、希望者のみのキャンパスツアー（屋上、高城寮など）を行いました。

高城会は飲み物とお菓子をご提供し、これまで有料だった参加費が無料となりました。今後もこの支援は続けていきますので、皆さまお気軽にご家族でホームカミングデーにお越し下さい。



IE15期生（左から2番目の筆者のみME）

⑤ 2017年12月 高専ロボコン全国大会応援支援

ロボコン全国大会への支援として、高城会では卒業生の皆さまへのご連絡と、応援に来ていただいた卒業生、選手、ピットクルー、指導教員および引率教職員への慰労会を主催しています。

以下は、川村宗弘会長（IE01期）のロボコン応援記です。

「アイデア対決・全国高等専門学校 ロボットコンテスト2017」応援参加！

高城会会長 川村宗弘

平成29年12月3日（日）、好天に恵まれたこの日、例年は国技館で開かれていた「アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト2017」（高専ロボコン）が、有明コロシアムで開催され、応援に参加しました。応援には勇校長、元校長の天野さんをはじめ、関東近隣に勤めるロボコンOBの方など総勢60名の応援で臨みました。

1回戦の対戦相手はくじ運が悪いというか、四国大会優勝の香川高専（高松）チーム、「推薦枠で出場する徳山高専にとって、今年は勝ち上がるのは難しいだろうな。」などと思って観戦しました。2試合目なので、お互いヒートアップしていないのか、動

きはどちらもあまりよくなかったのですが、なんと1回戦突破してしまったのです。これは「ひょっとしたら数年前の優勝の時ように勝ち上がるかも？」と思わせた試合でした。

地元の山口では、張間先生がインターネットのライブストリーミングを見ながら応援しており、SNSで連絡を取り合いながら、2回戦に臨んだのでした。その時の会話で「もう1回勝たないと生放送されないのではないか？」ということでした。生放送は15時から、案の定、生放送寸前の試合となりました。相手は長岡高専、結果暴走等のトラブルもあってあっけなく負けてしまいました。今年の徳山高専「がる男」は、「ふぐ皮」で風船を割るという地域性のあるロボットでしたが、構成メンバーの若さが目立ったように感じました。

今年のロボットは、従来のスピードに加え、相手とのぶつかり合いに耐える耐衝撃性が求められました。昨年の優勝校奈良高専は、スピードは非常に優れ、学生メンバーも絶対的自信を持っていたようでしたが、3回戦にパワーでロボットが倒されてしまいあっけなく負けてしまいました。結果的に今年は優勝した北九州高専、ロボコン大賞の大分高専とすべて九州に持っていかれました。

ただ、「がる男」スタッフの学生に卒業生を代表して言いたい！「全国大会に連れてきていただきありがとうございます。来年は、全国大会出場はもちろん、手ぶらで帰らないよう一層の研鑽を期待します。」



スタート前、緊張のセッティングタイム



慰労会参加者で記念写真撮影

“All’s Well that Ends Well”

一般科目 教授 吉留 文男



今の気分はどうですかと聞かれれば、「晴れ晴れとしていて、色で例えばスカイブルーの気持ち!」と素直に答えるだろう。ちなみにスカイブルーの色は穏やかな静けさや生きているということを象徴した色らしい。このような気持ちに導いてくれた徳山高専の学生に感謝の気持ちでいっぱいだ。

昭和54年に大学卒業と同時に英語教員として奉職に就いて以来39年間で過ぎ、ここ徳山高専でそのキャリアを閉じられることを非常に幸せに感じている。

初めて徳山高専に赴任した日、専門棟の中央階段を昇っている時に出会った4年生が「おはようございます」と声をかけてきてくれた。なんと元気な挨拶ができる学生がいることかと驚き、その印象を新任教員紹介の合同ホームで「First impression lasts!」(第一印象がものを言う!)と話したことを記憶している。そして、その時の好印象は裏切られることなく今も受け継がれている。単に挨拶の元気が良いというだけでなく、自主性を尊重し自由な気風を醸し出す文化を備えている。このことにあらためて素晴らしい学校だと再認識させられる。

放課後のクラブ活動で目にするのは部員たちの生き生きとした笑顔、躍動的な動きそしてムダのない練習風景だ。その風景の中で学生の主体的な姿勢とそれぞれのリーダーとしての資質を垣間見ることができる。それは3学科という小規模の高専の中で、体育系や文科系の活動で常に全国のトップクラスの成果を上げていることの証しだろう。

一方、学業に関してはどうだろうか。実は今の晴れ晴れしている心地よさは、授業を盛り上げ積極的に参加してくれた学生に依るところが多い。言うまでもなく学生の本分は学業だから、私と学生の間わりの大部分は授業に凝縮される。その授業を毎回楽しく過ごせたことは彼らのおかげである。そこには学ぶ意欲や知的な好奇心をもった学生が沢山いて、常に私は彼らから刺激を受けていたからだ。目標を見いだした学生が真摯に努力し、そ

の力を発揮していく姿に接してきた。またクラスメイトとの協力性やお互いへの思いやりは教室の雰囲気さをさらに和やかなものにしてくれた。このような中で仕事をやれることは本当に幸せであったと思う。しかも徳山高専で最後のクラス担任を迎えられたことも私の喜びのひとつになった。理由は素晴らしいクラスとの出会いがあったからだ(私が一番楽しんでいたのかもしれない?)。一般的にクラスは偶然に構成された集まりで、集団がうまくまとまることは難しいと言われるが、そうではなかった。クラスは個性豊かで聡明な面々で構成されていた。当時の学級日誌に書かれた出来事についての鋭いツッコミやコメントを読み返すたびに一人ひとりの顔が浮かんでくる。もし私が学生にもどれるなら、きっとこんなクラスで学生生活を送りたいと思うだろう。

振り返れば徳山高専の学生は人と人との出会いに恵まれ、アカデミックな環境で青春を謳歌できる生活を送って社会に羽ばたく。だから社会が彼らに期待を寄せるのも当然かもしれない。私もこのような環境を共有できたことに感謝したい。そして、徳山高専生には、社会の中心として活躍できる能力と人柄を備えていることを心に留め、自由なところで夢にむかって進んで欲しいと願うだけだ。

「終りよければすべてよし」のタイトルが自然と心に浮かんできた。今の私の気持ちにピッタリだ。

Good luck to you!



平成27年11月クラス写真

先日、高専ロボコン全国大会をベトナムから研修中のカン先生と共に応援する機会を得ました。残念ながら、本校は最後まで勝ち進むことはできませんでしたが、チームの頑張りに心が熱くなりました。大会中、これまでのロボコンの名場面がブレイバックされ、今回が記念すべき第30回大会であり、昭和63年の開始時より30年を経たことを再認識しました。実は私が本校に赴任したのはまさしく、この年でした。元号は、その翌年に平成に切り替わり、平成29年度末をもって定年退職を迎えるということは、ロボコン歴史と同じく30年間も本校にお世話になったこととなります。平成も間もなく終わりを迎えることが決定しており、期せずして、この平成の30年を本校で過ごしたこととなります。

さて、在任中は色々と貴重な経験ができました。嬉しいことも悲しいこともありました。人生観を最も大きく変えることになったのは、風力エネルギー利用の研究のため、米国テキサスの大学に10ヶ月間、滞在したことです。当時、日本の技術力は大変高く評価され、米国内でのホンダ、ソニーなどの日本企業製品の進出はすさまじく、どこに行ってもあふれかえっていました。たとえ中古でも日本車は高嶺の花で取引されており、なぜ、小さな日本の技術が世界を席巻しているのか、自分でもよくは理解できませんでした。その小さな日本から来たちっぽけな日本人は神秘的な国からやってきた異邦人と捉えられていたかもしれません。他方、テキサスは何事も大きく（体型も？）、時の過ごし方もゆったりとしていることに気づきました。この州は日本の2倍程の広大な土地を背景に、農業や牧畜業、同時に原油や風力などエネルギー関連産業までも盛んであり、とにかく日本では考えられないほどの豊かさを享受している国民性に驚かされました。今でもテキサス人は“Everything is bigger in Texas.”と誇りにしています。そのおおらかな性格とは全く異なり、日本では何事もせせこましく、効率が重要であり、従っ

て高密度、メンテナンスフリーで長持ちする工業製品が日本の魅力だったのだろうと考えています。

しかし今、これらの競争力は低下しつつあると思います。自動車業界などは世界に肩を並べているとは言え、もはやTVや半導体、それに世界一をずっと誇っていた太陽電池産業や国の基幹産業であった鉄鋼業など、生産量においては見る影もありません。単に器用なモノ作りだけでは、すでに新興国に追い上げられ、競争力が落ちてきていることを示しています。再び、国力を取り戻すためには、誰にも真似されないような創造的な仕事、すなわち量から質への転換が不可欠と考えられます。皆さんのような若者の今後の創造性に大いに期待します。ここで、もう一度、本校の学習教育目標を考えてみて下さい。「世界に通用する」の出だしが特徴的です。何が世界に通用するかはともかく、例えば、SolidWorks を用いて機械を設計し、それをPIC制御する演習などは、どこの国の技術者教育としても普遍的なものと考えられます。つまり、難しいことを考えなくとも皆さんは世界的な技術者教育の流れの一部に乗っていることに間違いありません。大事なことは、世界に通用するかどうかを自分で確認するために、是非、世界に飛び出してみることです。今、日本の若者の内向き指向が問題になっています。今こそ、世界の人達と向き合い、世界で何が求められているのか、自分の目で確かめてみて下さい。きっと、自分の進むべき道が見えるはずですよ。

Widen your world. Bon voyage!



米国風力博物館（テキサス州ラボック市）にてコイ・ハリス館長と

退職に寄せて

情報電子工学科 准教授 小林 明伸



高専だよりに載せる退職者あいさつの原稿執筆依頼のメールが来ました。遂にその時が来たのですね。寂しい気持ちもありますが、在職中に体験したことを思い出しながら綴ってみようと思います。

私は、昭和53年4月に徳山高専に赴任しました。赴任した年は、徳山高専は完成年度（設立から5年目で1年生から5年生まで初めてそろそろ年度）を迎えた年でした。ちょうど40年間徳山高専にお世話になるということになります。長かったとも短かったとも思えます。

赴任の前年に、面談のために校長室に御一緒に頂いた学科主任の戸田先生は、間もなく御病気で入院され、4月の最初には、帰らぬ人となりました。お通夜、葬儀に参列することが初仕事の様になってしまいました。ご冥福をお祈り致します。

担任は、13期生（3年生）、20期生（4、5年生）、24期生（2年生）、23期生（4、5年生）、31期生（3年生）、34期生（1、2年生）、40期生（2、3年生）と計11回経験しました。24期生は2年生も混合学級でクラス運営等に不便を感じることもありました。進路のことで学生と悩んだり、就職先内定を喜び合ったり、学生総会をサボった学生を叱りつけたこともありました。学生の意外な一面を見つけることも多くありました。

初めて1年生の担任をしたとき、入学式の後保護者の方に向けた挨拶の中、あるお願いをしました。高専に通う間、是非お子さんに弁当を作ってあげてくださいと。保護者の皆さんには、面倒なお願いですが、親への感謝の気持ちがきっと生まれると思いました。

担任の仕事の他には、学生主事補を通算4年、教務主事補2年、寮務主事補2年などを務めました。

クラブ活動の顧問については、赴任した時から吹奏楽の顧問を担当してきました。年度当初に地区の小、中、高等学校、大学、一般の団体の指導者の先生と会議で知り合いになり、コンサートなどでいろんな行事に参加してきました。また高専間では、ちょうど赴任した年から西中国地区高専音楽祭（広島、呉、大島、宇部、徳山の開催によ

る音楽関係のコンサート）が発足し、今までずっと運営を続けてきました。第一回は柳井市の労働会館で、こじんまりとした音楽会でしたが、回を重ねるごとに規模が大きくなり、大ホールで合同演奏も行うほどになりました。大切にしたい音楽会ですが、高専を取り巻く状況の変化により段々運営が難しくなっています。

吹奏楽に関する思い出として、映画のロケがあります。15年前、降ってわいた話ですが、高専のロボコンにスポットを当てた映画「ロボコン」のロケが徳山高専で行われることになりました。その映画の監督は全国の高専を見て回り、ロケに対する理解、ロボコンの実績、ロケーションの良さから徳山高専をモデルにしようと思ったそうです。教職員も学生もエキストラとして映画に出演することになり、オーディションも行われました。なぜか吹奏楽部は出演することが始めから決まっていた、部員の映画のロケに対する協力がすんなり得られるかと心配しましたが、内向き部員が多かった中、積極的な女子部員が「自分が出演したDVDがレンタルビデオショップに並ぶんよ。やろう、やろう。」と呼びかけたことで、一気にみんなが乗り気になり、心配はありませんでした。ロケでは主演の長澤まさみをはじめ小栗旬、塚本高史、伊藤淳史、などの俳優をすぐ近くで見ることができました。サインをもらった部員もいました。記念に買い求めたDVDはいつか当時を思い出しながらまた観ることもあるでしょう。

また、平成19年からは卓球部の顧問も兼任することになり、高体連や高専体育大会も数多く関わることができました。原田幸雄先生や長戸先生の手厚い指導による選手の活躍のおかげで全国優勝を生で体験できたのもかけがえのない思い出となりました。

これまで、多方面で多くの皆さんに長年お世話になった徳山高専に対する感謝の気持ちはいつまでも忘れずに、残りの人生を過ごしていくつもりです。皆様、ありがとうございました。

また働いてみたい職場

土木建築工学科 教授 原 隆

3月をもって定年退職します。41年間教員として勤めましたが、皆様のお支えであったという間の瞬間というのが実感です。関係の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

1. はじめての徳山高専

「徳山高専お願いします。」「徳山興産?」「徳山高専です。」「徳山高専? ちょっと、まっちょってね。聞いてくるけ。」1976年7月14日の徳山駅での私とタクシー運転手の会話です。その日は、城温三校長、石原俊学科主任、上司となる重松恒美先生と4人での面談。その後、学科の先生方7人と前日に重松先生が仕留めたウナギで食事をするという採用面接(?)でした。最高学年が3年生。学校内の道路は舗装されておらず、野球場は建設中。専門科目棟は机、ロッカーが山積みというところでした。採用間近になり、だんだん不安になってはきましたが、自分のできることを一所懸命やるしかないと思いました。

2. 皆で協力し建学に努力したころ

翌1977年4月に助手で採用されました。徳山高専では4年生が最高学年で、モノもお金も少ない中で教育・研究をしっかりとやろうということで、少人数の教員が、大学の講座のようなグループを組み、予算の使用も研究も共通で行い、グループごとに成果を競い意気に燃えていました。当時は企業との共同研究はほとんどなく校費のみですが、予算は現在に比べれば潤沢であったように感じます。2年目からは卒業研究の学生が配属され、研究体制も整いました。学生たちはパイオニアとして、意気軒昂で、ずいぶん助けられました。クラブ活動に熱中する学生もいましたが、高体連にも参加できず、地区高専大会ですら満足する成績は上がりませんでした。先生方も、「いずれは頂点」と熱心にご指導されました。私は1年目は野球、2年目からは柔道を任され、教育・研究・学生指導に一所懸命であったと思います。

3. 専攻科ができた

高専教育の高度化を目的に専攻科の設置が提案され、教員の学位資格が問われるため（当時は博

士は1名）、教員は学位取得に注力します。私は出身大学（愛媛大学）の教授が他界し、博士課程ありませんでしたが、重松先生のご尽力もあり、人事交流で1988年から豊橋技術科学大学の教員を2年勤めました。豊橋では、加藤史郎先生のご指導のもと、文字通り、教育・研究・産学連携・地域貢献の業務を教員の方々や研究室の学生とご一緒させていただきました。当時はHouston大学のHan先生、留学生のCheongさん、Fabioさんが研究されており、毎回冷や汗のゼミでした。また、後年、在外研究をお願いするWashington大学Gould先生や世界遺産調査を実施させていただいた日高健一郎先生との出会いもこの時期でした。1989年には初めての国際会議へ出席しました。

1995年に専攻科が設置され、研究室の専攻科生には国際会議発表と英文特別研究論文を目標とし、約60名全員がこれを達成しました。

4. 産学連携と国際交流

1994年にテクノリフレッシュ教育センターが設立され、徳山高専テクノアカデミアが発足し、産学連携・地域貢献活動が本格的になり、国際交流も盛んになりました。私は1998年から10カ月、2004年から5カ月在外研究を経験させていただきました。2005年にはISEC-03を主催し、市役所、高専、市民が一体となった楽しい国際会議となりました。

5. 最後に

何も知らない22歳の学卒者が63歳まで大過なく仕事できたのは、教職員や学生のご理解とご協力の賜物と感謝いたします。高専は小さい所帯ですが皆で協力し、退職のとき、また働いてみたいと感謝できる職場であってほしいと思います。皆様ありがとうございました。



気温52℃の
Jordan・Jerash
ハッタが私
左は山岡君

お世話になりました

総務課長 関谷 直樹



高校卒業後、当時の国鉄に就職、10年間勤務した頃、国鉄民営化に伴う再就職制度に応募し、実家に近い宇部高専に再就職しました。宇部高専では、国鉄時代のプログラマー経験を生かし、事務電算化のためのプログラム開発に従事することとなり、九工大に併任しCOBOLプログラムによるシステム開発を経験しました。その後、庶務係や人事係に配属となり、その間山口大学医学部に出向し、職員係で看護師さんの勤務管理等も経験しました。平成19年に管理職に登用され、呉高専、福岡教育大学、岡山大学、徳島大学と高専大学を転々としました。行く先々で管理職としての悩みは勿論ありましたが、そのことよりも、異動の度に人間関係を再構築することが、人見知りの私（そうは見えないかもしれませんが（笑））にとっては大きな苦勞の一つでした。

高校を卒業してから42年間のサラリーマン人生、様々な困難に遭遇し、自身を見失いかげそうになった事もありましたが、今思えば「ああでもない、こうでもないと思悩んだ全てのことが、結果的にはなるようになっており、当時「ケセラセラ」

というような余裕があれば、もう少し心穏やかに過ごせたらと思う反面、その時々では精一杯気張らなければ乗り切れなかったのかもという思いもあり、何がベストであったか今も答えはできていません。いずれにしても、今日まで、仕事を続けてこられてのは、数多の諸先輩からのご指導や、同僚や後輩の方々からのご厚情があったればこそであり心から感謝しています。最後に、徳山高専の益々のご発展と教職員並びに学生の皆様のご健勝を心から祈念いたします。お世話になりました。



お世話になりました

総務課課長補佐（会計担当） 岸本 篤信



昭和53年4月に学生課教務係に採用されました。初任給は10万円なかったと思います。過ぎてみるとあつという間に40年経ち3月末で退職します。

平成8年4月に人事係へ配置換となり、諸手当等いろいろ勉強する毎日でしたが、俸給決定などは難解で十分に理解できるものではありませんでした。平成9年3月に4月から山口大学人文・理学部庶務係へ異動する内示があり、人事係長によると業務の集中化で俸給決定は本部の業務となったが、理学部の担当となり大学院担当に係る俸給の調整額を担当するらしいとのことでした。（高専にはないな・・・）

4月から山口大学に勤めましました。大学院担当に係る俸給の調整額では、理学研究科に加えて新たに平成9年4月に設置された理工学研究科の2つを本部人事課へ上申するというものでした。

毎月1回理工学研究科の会議が工学部で開催されるので先生方とスクールバスで通いました。当時は有料だった宇部有料道路を通りながら、窓から眺める景色の移り変わりに季節を感じるのは楽し

みの1つでした。工学部庶務係の2名は後に人事交流で徳山高専に異動され、再びお世話になりました。

平成12年2月に父が亡くなり、3年の人事交流を終えた4月から再び徳山高専に勤め、多くは会計の業務に携わりました。

最後になりましたが、山口大学また徳山高専の皆様には大変お世話になりました。有難うございました。



退職者挨拶

皆様、大変お世話になりました。

総務課会計係 会計係主任 玉野 綾子



私は創立3年目の平成51年4月に採用されました。当時は学年進行中で、1期生に奥本先生、田村先生、熊野先生が3年生に在籍されておられました。また、建物は管理棟が1年前に、専門棟は竣工されたばかり、採用から2ヶ月後に図書館棟が竣工し、私は初めての職場で不安の中、新しい建物の中で仕事ができることを嬉しく思っていました。

採用から42年間、配置換えでいろいろな係を経験しましたが、一番の思い出は10年前に学生係に所属していた時の高専祭です。管理棟が耐震工事で使用できない中、学生会のメンバーが工夫しながら頑張ってくれたおかげで大成功に終わりました。

次に私が会計係2年目の8年前、私を除く会計係3人の方が転出や配置換えとなり、まだ仕事の手順を十分把握していなかったため、他高専や機構本

部の方に教えていただきながら夜遅くまで残業をしたことが今では懐かしく思い起こされます。

こうして退職の日を迎えられるのは、先輩の方たちや皆様のおかげだと感謝しております。

大変お世話になりました。

最後になりますが、皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



注目の徳山高専ニュース

しゅうニャン橋守隊 第1回インフラメンテナンス大賞「国土交通大臣賞」を受賞

地域の道路インフラを長持ちさせるため、身近な橋の清掃や簡易点検、修繕活動などを行っているボランティアグループ『しゅうニャン橋守隊』が、総務省など6省が創設した「インフラメンテナンス大賞」で、国土交通省の分野の最高賞「国土交通大臣賞」を受賞しました。周南地域の産官学民の連携により2015年に結成され、幅広い世代が日常生活の延長上で気軽に楽しくメンテナンスを体験できる取組が、人材や予算面で課題のある行政への展開が期待できるとして、注目が集まっています。

7月24日（月）に中央合同庁舎で行われた「第1回インフラメンテナンス大賞 表彰式」に、しゅうニャン橋守隊メンバーとして本校より土木建築工学科の海田辰将准教授（副隊長）と環境建設工学専攻2年の小山諒子さん（学生隊長）が出席し、国土交通大臣より表彰状と楯が授与されました。



写真：国土交通大臣より表彰状を受け取る環境建設工学専攻2年小山諒子さん

編集後記

高専だより第71号が出来上がりました。高専だよりは、年度内の在學生、卒業生、教職員の活動状況の様子を主にお知らせするものですが、学生、教職員の1年間の成果の集大成とも考えられます。それぞれの立場で、日々の努力を紡いできた成果が、この高専だよりを支えています。これからも、在學生、卒業生、教職員の皆さんの活躍に期待し、高専だよりで、より多くの情報をできるように努力いたします。最後に、原稿を執筆いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

徳山工業高等専門学校

National Institute of Technology, Tokuyama College

徳山高専だより No.71

発行 総合企画室
所在地 〒745-8585 山口県周南市学園台
TEL (0834) 29-6200 (代表)
FAX (0834) 28-7605 (代表)
印刷 大村印刷株式会社
発行日 2018年(平成30年)3月12日
URL <http://www.tokuyama.ac.jp/>

National Institute of Technology, Tokuyama College



本校の「設計情報工学」プログラムは、日本技術者教育認定機構（JABEE）からの認定を受けています。



本校は、平成24年度に独立行政法人大学評価・学位授与機構の認証評価を受け、認証評価基準を満たしていると認定されました。平成18年度に同機構による認証評価を得ており、引き続き認定されたものです。



本学の申請が文部科学省の平成28年度大学教育再生加速プログラム（AP）高大接続改革推進事業「テーマV 卒業時における質保証の取組の強化」に採択されました。